礼拝の法は信仰の法

～そこが知りたい礼拝式文～

松　本　義　宣　著

日本福音ルーテル教会

〈も　く　じ〉

はじめに …… 1

礼拝が始まる前に …… 4

1. 開会の部 …… 7

2. みことばの部 …… 20

3. 奉献の部 …… 44

4. 聖餐の部 …… 49

5. 閉会、または派遣の部 …… 73

まとめ …… 83

※凡例

① 本文中の「旧式文」は、1968年から試用された口語によるいわゆる茶色式文。

② 「新式文」は、1982年から試用され、1994年、教会総会で承認された「礼拝と洗礼」この式文は、一応、私たち日本のルーテル教会独自で検討設定したものです。

しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時がくる。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。

ヨハネ４:23〜24

J. J.

礼拝の法は信仰の法

【はじめに】

私たちは毎週日曜日（あるいは、その他の定められた曜日に）、教会で礼拝を守っています。式文に従い決まった順序で、決まりきった言葉を唱えています。礼拝式文は、初めての人には決して易しいものとは言えないですし、逆に、もう何も考えずに自然と（悪く言えば形式的、機械的に）流れていく、口を出るという方も多いでしょう。しかし、その内容や意味を説明せよ、そして礼拝とは何か、と改めて問われると、けっこう困る方もあるのではないでしょうか。あるいは、形式的な式文は苦手だ、もっと自由に礼拝したい、という考えの方もあるかもしれません。この小冊子は、礼拝で用いている式文の学びと理解を通して、私たちの礼拝とは何か、を考えるために、式文の簡単な解説をするために書かれました。

さて、Lex orandi, lex credendi et agendi（祈りの仕方が信仰と生活の仕方）という言葉があります。単純には、祈りが信仰の中心という意味ですが、教会の歴史の中では別の意味で語られる言葉です。それは、文字通りの意味で「祈りの規定は、信仰の規定」ということです。祈りの方法（仕方）が、信仰の方法（生活）の表れである、逆に、信仰の姿勢は祈りの中に反映する、ということです。言いかえると、私たちの祈りは私たちの信仰の表れであり、私たちの信仰表現が祈りの形なのです。これは何も、私たち個人の祈りがよくないと（上手でないと）信仰もよくない（未熟）というのではありません。むしろ、一般的には、礼拝全体が、「祈り」といってよいのですから、教会において、礼拝の法は信仰の法、つまり私たちが共に守る礼拝（祈り）

は、私たちの共有する信仰の形であり、礼拝式の中に、信仰があるということです。

礼拝は、教会の中心であり、教会が歴史の中で形造り伝えてきたものです。礼拝式文の形は信仰のあり方の反映であり、その学びは、私たちの信仰の検証になるのです。また、改めて礼拝の豊かな内容・意味を知ることにより、逆に礼拝の形式や内容の検討も出来ることにもなるでしょう。礼拝や祈りが定式文で、形式的だという方へはこう答えたいのです。礼拝の定式化が長い信仰の伝統の結晶であり、その定式化が個人化をふせぎ、また、自分自身にも、客観的に信仰を言い聞かせる働きがあったのです。そして、自由な（勝手な）礼拝・祈りは、内容が形式化して行くが、形式がある礼拝は、内容が自由（豊か）に定められるのではないでしょうか、と。

教会は、その初代教会の時代から主の日である日曜日に共に集い、キリストの復活を祝ってきました。この集いの中心は、「み言葉」と私たちが恵みの手段と呼ぶところの「聖礼典」でした。この二つを通して復活の主は神の民のために臨在し、その民を教え、慰め、励まし、証と奉仕の生活へと人々を強めました。つまり礼拝とは、イエス・キリストを通して出来事となった神様の救済の業、それに私たちが与ることであり、生ける神様との出会いであると言えます。人格的な交わりの場なのです。よく、「礼拝を捧げる」という言葉を耳にしますが、これは明らかに誤りです。礼拝は私たちの業や宗教的な心から神へ向かうのではなく、神が私たちに奉仕して下さる出来事、神から向かってくる業です。ですから、私たちは「礼拝に与る」「守る」と言うのです。そしてもちろん、その神様に、讃美と感謝を「捧げる」のです。出会いであるということは、この二つが礼拝において起こるということで

す。呼びかけと応答、問いと答え、神と私たちの生きた交わりがそこで行なわれます。そしてこれは、本来、個人として私たちに起こる事柄と言うより、むしろ神の家族である信じる者たちの共同の交わりの中で起こる事柄です。礼拝（レイトウルギア）という言葉はもともと「民の業」が、後に「典礼」という意味になったものです。つまり、礼拝は神の民の業です。礼拝とは教会そのもの、ほとんどイコールと言えるものなのです。私たちが主にある兄弟・姉妹と共に礼拝に集う時、それは主イエスとの交わりの中にあることを、その本来の意味で体験することです。

さて、前置きはこれくらいにして、礼拝式の解説の方に入りたいと思います。礼拝の歴史やその変遷を細かく述べるときりがありませんので（日本のルーテル教会の式文だけでも大変です）、今、私たちが用いているいわゆる新式文を中心に見て行きながら、適宜旧式文と比べつつ、説明を加えていきたいと思います。

【礼拝が始まる前に】

「二人または三人が、私の名によって集う所には、私もまたその中にいるのである」（マタイ18：20）と主が約束されたように、どの礼拝においても主が私たちと共に臨在しておられることを、私たちは信じます。私の教会では、出席簿の一行目は必ず空欄にしています。サインはされませんが、イエス様が一番に来られているからです。主はみ言葉と聖礼典によって私たちに臨まれるが故に、礼拝の中心はそこにあります。礼拝堂の正面には、その象徴として聖壇（祭壇）があります。あるいは、聖卓（聖なる食卓・聖餐をいただく卓）を中心とした、司式者と会衆が対面して礼拝を行う会堂もあります。私たちが礼拝の中で頭を下げたり、ひざまずいたり、黙想したり、沈黙を守ったりするのは、この理由からです。また、礼拝の時間を守ること、これが意外と忘れがちになります。礼拝の時とは、神様とのデートなのですから、遅れないで、いえ、むしろ少し早目にきて用意をしておきたいものです。これは、伝道的見地からも大切で、初めて礼拝に来た人が、教会員が時間になってもパラパラ、途中で大勢ゾロゾロ入って来るのを見る、というのは、あまり良い印象を与えないと思うのですが、どうでしょう。

もう一つ、礼拝前に忘れてはならないことは、この時に、当日の聖書箇所（日課）を開いておく、ということがあります。日本のプロテスタント教会のよいところは、各自が聖書を持ち、礼拝での朗読の時も一緒に読む（黙読する）、という習慣があることですが、その際、司式者のアナウンスがあって初めてその箇所を探し始める、というのは礼拝の流れを止めてしまいますし、結局まにあわず、何が読まれたかわからずに終わりがちです。あらかじめ開けておくか、その時になっ

てあわてるより朗読を集中して聞く、ということの方が大切です。目で追うよりよほど集中してみ言葉が耳に残るはずです。また、新来者にとっても、初めて触れる聖書にてこずるより、教会員の「聞く」姿勢に教えられること大だと思われます。

【前　奏】

礼拝は多くの場合、オルガンの前奏によって始まります。この音楽は、単に場をにぎやかにするためのものではありません。前奏はその日の礼拝の心構えを指示し、私たちがその日守る礼拝のテーマが示される時でもあります。後ほど詳しく述べますが、毎日曜日（主日）には決まったテーマがあります。教会暦に従って聖書日課が定められ、詩篇、祈り等も、おのおのそのテーマの下にあります。そして、讃美歌も決して無目的に、好きだから、歌えるから、元気が出るから等の個人的、主観的理由で選ばれるのではなく、基本はその日のテーマに従って選ばれます。そして昔から、教会は特定の旋律（メロディ）を特定の主日、またはみ言葉、あるいは期節（教会暦）と結び付けてきました。最初に置かれる讃美歌は、そのようなメロディが選ばれることになります。そして、礼拝を始める前奏は、その讃美歌（コラール）に基づく前奏曲が奏されることになります。ですから、逆に、その日の前奏を耳にした会衆は、その中に特定の旋律を聞き取ることにより、今日は何の日だ、何のテーマだ、ということがわかることになります。わかりやすく言えば、たとえば受難節に「きよしこの夜」は困りますし、宗教改革日にはやはりルターの「神はわがやぐら」がふさわしい、といったようなことです。これが主日の主題や、日課が安定していた時代には、伝統の中で細かく決まっていたのです。私たちルーテル教会

の誇る音楽の父バッハの膨大なオルガン曲のコラール前奏曲集は、この礼拝前奏のためでした。ですから、この前奏を耳にし、静かに黙想しつつ礼拝に備えるというのは、そこから、もうその日のみ言葉の語りかけが始まっている、ということになります。ぜひ、この点を考慮して、前奏が準備されることを望みたいものです。

もう一つ、実際的な効用として、この前奏の音楽が、人々が座席についたり、あらかじめ献金の準備をしたりという礼拝堂内の雑音を消す、ということもあります。これは、礼拝全体に言えることで、礼拝の移行や空白時（奉献や陪餐時等）に奏楽があるのも同じ理由です。つまり、オルガン奏者は単なる伴奏者ではなく、司式者と共に礼拝式を司る責任者でもあるのです。ですから、奏楽者の名前が、司式者と共に、週報にクレジットされているのです。

1．開会の部

【讃美歌】

初めの歌	＃讃美歌、詩篇、入祭頌のいずれかを用いる。詩篇または入祭頌が用いられるときは、その終わりに「栄頌」を続ける。
衆］（栄頌）	父　み子　み霊にみ栄え、 初めも　今も　のちも世々に絶えず。アーメン

詳細は前述しましたが、この会衆参加の讃美歌こそ、M. ルターの宗教改革の特色の一つです。それまでは礼拝がラテン語で、つまり人々にとっては、外国語で行なわれ、その讃美も、司祭や修道士の聖歌隊が厳かに行なうのを会衆はただ聞くだけでした。礼拝はただ傍観者として眺めるだけだったのです。しかし、ルターは母国語を用いて、参加する会衆すべてが賛美する礼拝を取り戻しました。讃美歌＝コラール＝衆讃歌はそのしるしです。これに限らず、私たちのルーテル教会の式文は音楽・歌が重んじられています。それは、単に礼拝を華やかにするため、飾るためではありません。ルターは言っています。「すべての芸術、とりわけ音楽が、それらを造り与えたもう神への讃美にふさわしく、それは悪魔の業を遠ざける」。また「讃美歌は、会衆が行なう説教である」と。

礼拝の音楽は、私たちの信仰告白の手段です。言葉は曲を付けることで感動的になり、より強く訴えかけるものとなります。また記憶を助けます。言葉の丸暗記は難しいですが、曲とともにであると意外と忘れません。そして多くの人と心を合わせる、というしるしになります。言葉と曲が不可分であるならば、たとえ言葉が通じない中でも、ある

メロディが歌われれば、各々自国語でそれに和し、共に賛美することができます。また、礼拝では会衆は原則として旋律のみを歌い、ハーモニーはつけません。これは、同じ言葉を、同じ音程、同じリズムで声を合わせる、すなわち公同の礼拝の一致、共に一つとなることの具体化のしるしです。

教会は昔から、喜び、感謝、信頼、決意の信仰を、それぞれの国、場所、礼拝、集会、家庭で表明してきました。それが讃美歌として残されてきたのです。私たちも、私たち自身の歌声を、高らかに声を合わせていきたいと思います。そしてこれが、私たち一人一人による、説教・み言葉の伝達・信仰告白であることを忘れないようにしたいものです。また、歌うとき、ただ漠然とついていくのではなく、その歌詞に耳を澄ませて下さい。その日の説教よりよほどピンとくること（が多いこと？）請合です。

【栄唱（讃美唱）】

讃美歌を用いずに、詩篇を用いた場合は詩篇につづけて「栄唱（グロリア・パトリ）」が用いられます。旧式文では讃美頌にあたります。

実は本来的には、これによって礼拝式本体に入ることになります。この部分はラテン語でイントロイト（英語のイントロダクション）と呼ばれていますが、導入とか入場という意味です。本来、司式者や奉仕者は詩篇歌が聖歌隊によって歌われる中、会堂へ入場しました。ですから讃美頌とは入場（イントロイト）の詩篇なのです。そして、いよいよ礼拝が正式に始まる導入部なのです。以前にも述べたように、毎主日にはテーマがあり、詩篇もそれによって選ばれ定められているのですが、その詩篇がここで示されます。逆にいえば、ここで語られる

詩篇の主題が、その日のメッセージのテーマと関連するものとして聞かれ、読まれ、歌われるのです。現在の礼拝では詩篇を用いる場合は、ほとんど司式者が朗読するか、交読するところが多いのですが、聖歌隊等がこれを歌い、また礼拝もここまで奏楽者が導いて、牧師がここで入場してくる、といった形ができたらいいなと思います。この詩篇に答えて会衆はグロリア・パトリ（ラテン語で父の栄光）を歌います。これは独立した曲（言葉）ではなくて、詩篇に対する応答唱（交唱）です。「父み子み霊の神にみ栄えあれ」と三位一体の神信仰によって詩篇の讃美をしました、という宣言の歌です（なぜなら詩篇はユダヤ教や回教でも用いますから）。ですから、ここで詩篇（讃美頌）を用いずにグロリア・パトリだけを歌うということはありません。

【初めの挨拶（み名による祝福）】

み名による祝福
司〕　父と　子と　聖霊のみ名によって。
衆〕　アーメン。

前奏、初めの讃美歌、あるいは、詩篇と栄唱、または、イントロイトに引き続き、はじめの挨拶（祈願）が唱和され、礼拝への導入がなされます。いよいよ礼拝式プロパーの部分です。「父と、子と、聖霊のみ名によって」「アーメン」と司式者と会衆との間で交されるこの挨拶と祈願は、この礼拝が三位一体の神（父・子・聖霊）の臨在の下に行なわれることの宣言でもあり、またその神への信仰によって取り行なわれることの相互の確認でもあります。旧式文では小さい文字で「会衆は起立する。司式者は聖壇に向かって立ち…」とありました。これ

は神の臨在を願う祈願に強調点がおかれていたための所作です。現在では会衆の方を向いて行なわれることが多いのですが、それは、礼拝開始の相互の挨拶を強調するためで、この場で生きて働き、私たちの礼拝に奉仕してくださる神様を真中に（聖壇の先にではなく、み言葉と讃美の交される中＝司式者と会衆の間に）感じるためです。礼拝の始まりは、神社で拍手を打ち、神々の注意をひいて御参りをする、のとは違います。主なる神は、先んじてすでにこの礼拝に私たちを招くために来ておられるのです。ただし、会堂の造りにより、聖卓を中心とした対面式・奥に聖壇がある所と様々ですので、各教会で検討が必要でしょう。

また、ここに限らず、三位一体の神の名によって祈る際、十字を切る習慣がなされています。父で手を上に、子でその手を下にし、聖霊で、その縦に降ろしたラインに横棒を入れる、という例の動作です。このみ名を唱える時、十字を切るのは、私たちがこの名によって授けられた救いのしるし、洗礼を想起させるためです。この所作は、私たちの主イエスの十字架の業への信仰の外的な表現であり、また、三一の神のみ名によって授けられた洗礼を通して、この教会に加えられたことを思い出させます。この慣行はキリスト教会の早い時期にさかのぼるもので、ルターも小教理問答の中で定めています。この所作は、今は、司式者が代表して行ない、信徒はなかなか行なうことのないものですが、もっと一般に回復されてよいものではないでしょうか。

【ざんげ】

罪の告白の勧め　　＃他の「罪の告白の勧め」に変えてもよい。

司〕　私たちは 父なる 神のみ前に まごころをもって 近づき、罪をざんげし、主イエスキリストのみ名によって ゆるしを願いましょう。

＃聖餐を行なうときは、次に変えてもよい。

司〕　主イエス キリストは、私たちが罪のゆえに受くべき死と苦しみを負い、十字架に渡され、神のみ旨を全うし、死からよみがえり、救いを成し遂げてくださいました。

また、主は 私たちに聖餐の礼典を設けてくださいました。それは、私たちが 主イエス キリストによる救いを信じ、主に従い、主の戒めを守り、主が私たちを愛されたように 私たちが愛をもって 互いに仕えるためです。

私たちは 使徒パウロの勧めに従って、神のみ前に罪をざんげし、この礼典にあずかり、主の死と復活における 聖なる慰めと力とに満たされましょう。

罪の告白　　＃他の「罪の告白」に変えてもよい。

司〕　父なる全能の神よ。

全〕　私たちは生まれながら罪深く、けがれに満ち、思いと ことばと 行ないとによって多くの罪を犯しました。

私たちは み前に罪をざんげし、父なる神の限りないあわれみによりたのみます。

＃次の祈願を続けてもよい。

司〕　あわれみ深い神よ。

全〕　み子イエス キリストのゆえに、すべての罪をゆるしてください。

聖霊によって、主と主のみ旨についてのまことの知識を与え、また主のみことばへの従順な心を私たちに与えてください。

ゆるしの祈願祝福　　＃他の「ゆるしの祈願祝福」に変えてもよい。また、次の「キリエ」の後に行なってもよい。

司〕　ひとりのみ子イエスキリストを死に渡し、すべての罪をゆるされた あわれみ深い神が、罪を悔い み子を信じる者に、ゆるしと慰めを与えてくださるように。

衆〕　アーメン。

続いて、ざんげの部に入ります。私たちが正しく神の礼拝に（み言葉による奉仕）に与るために、まず私たちの罪を心からざんげし、主のあわれみと恵みを確信させられる必要があることは言うまでもありません。これが【初めの挨拶】と次の【キリエ】の間にあるのは、私たちが礼拝への「心」の準備をするという目的からです。ここは三つの部分からなります。まず『罪の告白のすすめ』旧式文では（司式者の呼びかけ「主にある愛する兄弟姉妹よ、…」から、交互に歌う「主はわが罪をゆるしたまえり」まで)、次に『罪の告白』旧式文では（「私たちを造り、あがないたもうた…」から会衆が一緒に唱和する「私たちのために、そのひとり子を死にわたされた…」の終わりまで)、そして『ゆるしの宣言（祈願と祝福)』です。

ざんげはもともと私的なものとして旧約聖書時代以来行なわれていた信仰的行為でした。今ではざんげイコール悔い改め、と思われますが、本来、神への信頼と服従のないところにざんげは存在し得ないものです。それは主に感謝し讃美することに通じていました（ヨシュア7:19)。やがて哀悼と悔しゅんを現わすしるしとして灰を用いたりすることで、ざんげそのものの意味が強調されるようになりました（ヨブ42:6)。このことはキリスト教にも受け継がれ、四旬節（受難節）に入る週の水曜日を「灰の水曜日」として特別に悔い改めの日として守る行事があります。そして、教会の制度が確立するにつれて、その個人の罪のざんげは、司祭（牧師）に個別に行ない、司祭がそれを聞き、赦しを与えるという「告悔」がサクラメント（礼典）として成立していきました。初代の教会では、受洗者のざんげの強調は言うに及ばず、一般信徒も金曜日か土曜日にざんげをしない者は日曜日の聖餐式（ミサ）にあずかることができなかったそうです。それが時代を経て整備され

て礼拝の中に共同のざんげをいれて、そのあとパンとぶどう酒に与るようになった、そう理解しても間違いではないでしょう。ただ、現在私たちはこういった私的ざんげの習慣がありませんから、とりわけここの部分は心を込めて、また祈りを込めて行なう必要があるでしょう。もっとも、これは、日本のルーテル教会の話で、ルーテル教会そのものには、私的ざんげは保たれてきており、これは今日、牧会カウンセリングの見地からも、見直していくべき大切な課題でしょう。さらに、1996年版の新しい「ルーテル教会式文（礼拝と諸式）」青表紙本の中には、新たに「ざんげ」が入れられました。

大切なのは、しかし、ここでの罪の告白の言葉は、対人関係における行為、個人的なものから、神に対する行為、信仰者の共同行為としてとらえられているということです。私の道徳的罪ではなく、私たち人間の神様に対する、個人の努力で左右され得ることではない「罪」、その赦しを願うということなのです。まず初めの部分「すすめ」がなされますが、これは詩篇43：4「わたしは神の祭壇へ行き、わたしの大きな喜びである神へ行きます。」とヘブライ10：22「まごころをもって信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか」から取られた言葉です。旧式文にあったその後の交唱は詩篇124：8「われらの助けは天地を造られた主のみ名にある。」同じく32：5「わたしのとがを主に告白しよう」から取られています。典礼文は一貫して聖書的なもので、その多くは聖書本文の引用から成っていることも覚えておきたいものです。

続いて『罪の告白』に入ります。旧式文では、まず司式者が「私たちを造り、あがないたもうた全能の神よ、」と呼びかけました。この言葉は古いローマ教会からの伝統的な定詩をそのまま引き継いだもので

す。ローマ式階段祈祷と呼ばれますが、それは司式者（司祭）と礼拝奉仕者（司祭補）間で交互に交されたものです。「階段」というのは、これが司祭たちが会堂に入場して祭壇への階段を昇りながら唱えたところからきています。しかし、新式文では、この告白は共同の行為として、司式者と会衆全員の唱える言葉となっています。旧式文では、途中から「私たちのために、そのひとりごを死にわたされた……」で会衆が加わりました。そこでは、司式者が代表して告白し、会衆は祈願で唱和する（「み子によってすべての罪をおゆるしください」という）不完全な形態を残していますが、新式文では、もっと徹底して、一緒に「私たちは生まれながら罪深く……」と唱えるようになっています。これは、すべての者が、等しく罪人として、まずざんげすることの重要さを示します。「生まれながら罪深く」というと、神学的にはいろいろと問題もありますが、正しく「罪」を理解し、告白（ざんげ）をしていく姿勢が、礼拝にはなくてはならないのです。

ところで、この告白の言葉で一つ付け加えておきたいことがあります。ここで私たちは「思いと、言葉と、行ないによって、あなたのみ前に多くの罪を犯しました」と言いますが、カトリック教会の式文では、「行ない」の後に「怠り」という言葉を付け加えています。私は、これは大変示唆に富む、素晴らしいものだと思っています。確かに私たちは、思いと言葉と行ないによる罪については簡単に（いえ、本当は決して簡単なことではありませんが）思い出すことができます。けれども、罪とは、何かをしてしまった（思いと言葉と行ないによって）ものだけではなく、何かをしなかった「怠り」の罪もあることを忘れがちです。さきの宣教百年にあたり告白された私たちの教会の信仰宣言にも、私たちが過去の歴史の中で「行なうべきでなかったことを行

なってしまった罪と、行なうべきだったことを行なわなかった罪とを…犯しました」と言っています。すべきことをせず、神様なしには良き業をなし得ない「怠り」の告白も忘れないでいたいものです。

さて、最後にもう一つ、このざんげが、対人関係における罪告白から、対神関係における罪の告白（ざんげ）となったことははじめに述べましたが、それでも尚、次のことは覚えておきたいと思います。イエス様は礼拝に際して、まず兄弟と和解することの大切さを教えられました（マタイ5：23, 24）。礼拝において、私たちは、過ぎた日々に犯したであろう隣人への具体的な罪のざんげ告白も「砕けた悔いた魂」（詩篇51：17）の姿をもって省みたいと思います。

ざんげの部の終わりは『ゆるしの宣言』です。罪の告白と恵みを求める祈願に続くのは、赦しの宣言です。神さまがあわれみをもって、救い主イエス・キリストへの信仰によって私たちを神の子としてくださるという慰めに満ちた確信を与えられます。旧式文では「信じるものには…」「聖霊を注ぎ…」「信じて洗礼を受ける者は…」という教会の特徴的な主張と教理が織り込まれています。本来、礼拝における罪の赦しは、福音（み言葉と聖餐における賜物）においてのみ成立するものですから、ここでは「ゆるしの宣言」ではなくて、『赦しの祈願祝福』がふさわしいでしょう。新式文ではそうなっています（旧式文でも最後の一文は祈願形です）。ただし、日本のような伝道地での礼拝では、常に求道者の礼拝参加がありますから、旧式文にあったような「赦しの宣言と洗礼への招き」が、ここで繰り返されるのは大切なことであったと思います。

それぞれの教会で、工夫がなされてよいところでしょう。

【キリエ】

キリエ（主よ）

（一）

司〕　平和のうちに 祈りましょう。

衆〕　主よ、あわれんでください。

司〕　神よりの平安と 霊の救いのために祈りましょう。

衆〕　主よ、あわれんでください。

司〕　世界の平和と 神の教会の成長と 主の民の一致のために祈りましょう。

衆〕　主よ、あわれんでください。

司〕　この聖なる家に、神への恐れと 信仰をもって集い、感謝と讃美をささげる者のために 祈りましょう。

衆〕　主よ、あわれんでください。

司〕　神よ、恵みによって救い、助け、守り、あわれんでください。

衆〕　アーメン。

（二）

司〕　主よ、あわれんでください。

衆〕　主よ、あわれんでください。

司〕　キリストよ、あわれんでください。

衆〕　キリストよ、あわれんでください。

司〕　主よ、あわれんでください。

衆〕　主よ、あわれんでください。

＃キリエは（一）（二）に代えて、讃美歌「キリエ、恵み豊けき」を用いてもよい。

ざんげの部に引き続き、キリエが唱えられます。礼拝式の中で、詩篇と栄頌は毎週変化しますが、キリエ（この後にくるグロリア・イン・エクセルシス等も）のように固定化された部分を「通常文（典礼固定文）」と呼びます。いわゆるミサ曲というのは、この通常文に曲をつけたものです。ミサ曲が普通キリエから始まるのはそういう理由からです。

さて、讃美頌（詩篇等）がその日の礼拝式で語られる神の恵みのみ言葉を予告した後に、教会は、その神の恵みにふさわしくないという思いをこめて、キリエ・エレイソン（ギリシャ語で「主よ、あわれみたまえ」の意）と唱えます。この言葉はマタイ9:27、同15:22、同20:30, 31、ルカ17:13、同18:39、マルコ10:47にある表現にもとづいています。これは神の恵みと慈しみを前にした時に、私たちの欠けの多さと不適格さを痛感する心からの叫びとして出てくる最後の言葉と言えるかもしれません。そして、切なる願いの言葉でもあります。

本来、このキリエが定式化したのは「連祷」の応答の言葉からです。連祷というのは、司式者の祈りの先唱に会衆が応唱しながら繰り返されていく祈りの形式（連なる祈り）で、その応答の部分が独立したものです。一般的に用いられているのは、（二）の「主よ、キリストよ、主よ」と3回繰り返す、最も単純な型ですが、6唱、9唱の型とたくさんあります。新式文の（一）は本来の連祷型のもの（司式者の祈祷に会衆が「主よあわれんでください」と答えていくもの）です。この部分は礼拝文の中でも最も古いもので2世紀には固定されていたところです。

ある教会では、このキリエのあとに、前項の「ざんげの罪のゆるしの祈願祝福」を置いているところがあります。しかし、キリエの「あわれみ」は、罪のゆるしのための祈願というより、今述べたような、とりなしの祈りと考えられます。

【グロリア】

グロリア（栄光）　＃グロリアの★印以降の部分は、交唱、応唱、斉唱のいずれによってもよい

司〕　天には栄光　神に、

衆〕　地には平和 み心にかなう人に。

★主をあがめ 主を仰ぎ、

主を拝み 主をたたえます。

主なる神 天の王 全能の父よ、

主の大いなる栄光に 感謝します。

主イエス キリスト、神のひとり子、

父のみ子、神の小羊、世の罪を取り除く主よ。

私たちを あわれんでください。

私たちの祈りを 聞いてください。

父の右におられる主よ、

私たちを あわれんでください

聖にして ただひとりの主、いと高きキリスト。

主は聖霊とともに 父なる神の栄光のうちに。（アーメン）

＃グロリアに代えて、教会讃美歌「いと高き神にみ栄あれ」を用いてもよい。

あわれみを求める願いに引き続いて、教会はグロリア・イン・エクセルシス（ラテン語で「天には栄光」の意）の言葉で讃美の声を上げます。これは、ご存じのように、主のご降誕に際して天使たちが歌った讃美の歌（ルカ2：14）です。三位一体の神のそれぞれの位格にキリストに対する信仰と讃美の言葉が付け加えられ、現在の形になりました。ほとんど「信仰の告白」と言ってよいほどの、礼拝の中に臨在されるイエス・キリストの神聖（聖性）への讃美となっています。これによって、この礼拝が、主の、受肉とあがない、絶えざる執り成しの

出来事である、ということが表明されることになるのです。このキリエとグロリアのつながりは、ルカ17:11～19を思い起こさせます。助けを求めてやってきた十人のらい病人は「主よあわれんでください」と懇願します。そして彼らがあわれみを体験した時「そのうちの一人は（帰ってきたのはたった一人でしたが）自分が癒されたことを知り、大声で神をほめたたえながら帰ってきた」とあります。私たちも「砕けた悔いた魂」（キリエ）に続いては、声を上げて感謝と栄光を神に帰す歌（グロリア）を声高く歌いたいものです。たとえたった一人（小さな群れ）であったとしても。

この部分は6世紀頃には礼拝に取り入れられ、9世紀には今日の形にととのえられたものだといわれています。また、伝統的にこのグロリアは、待降節（アドベント）と受難節（レント）の期間には省かれるのが普通です。前者は、主の降誕が未だであり、その備えの時であるのを強調するため（もとは降誕の讃美ですから）、後者は、主の十字架の出来事に深く思いを巡らすため、受難の期節は華美な歌唱は控えることが求められるためです。礼拝の教育的側面からも、あるいは教会暦のめりはり・意味を考えさせ、深めるためには大切な習慣と言えるでしょう。聖壇や説教台の布や牧師のストラ（首から下げる布）の典礼色とともに（これについては後述）、典礼の期節感についての理解も、信仰の生活には忘れてはならないものがありますから、大切にしていきたいものです。

2. みことばの部

【祝福の挨拶】

祝福の挨拶

司〕　主が 共に（おられるように）。

衆〕　また、あなたと共に。

続いて、司式者と会衆の間で祝福の挨拶（祝礼と返礼）が交されます。旧式文では「主、なんじらとともにいまさんことを」「主、なんじの霊とともにいまさんことを」の部分です。これは聖書の時代の人々の挨拶に基づくもの（ルツ記2:4, 士師6:12, ルカ1:28, Ⅱテサ3:16, Ⅱテモ4:22等）ですが、礼拝式の中では、新しい部分に入る時、典礼構成の区分点にこれが交されるしきたりになっています。つまり、ここからは次の段階になりますよ、いいですか、準備しましょう、という挨拶であり、合図なのです。ですから、ここから、礼拝は、み言葉の部になるわけです。この他に、私たちの式文では三度出てきます。奉献の部、聖餐式の部、そして、最後の派遣の部に入る時です。この司式者と会衆の間で行なわれる祝福の交換は、礼拝が新しい段階に入るに際して、改めて主の臨在と導きを確認し、心の備えをするためですが、もともとは、ここで司祭（司式者）の交替がなされていたのです。むしろ、司式者が交替する度に交されていた挨拶が、だんだん典礼区分となっていったのです。それにしても、大勢で交替して司式できるなんて、楽でいいなあ!?

【特別の祈り（主日の祈り）】

特別の祈り

司〕　祈りましょう。

＃「特別の祈り」にさき立って、自由祈祷、或は黙祷が行なわれてもよい。

――（特別の祈り）――み子、主イエス キリストによって祈ります。

衆〕　アーメン。

「祝福の挨拶（祝礼と返礼）」によって礼拝式は新たな段階に入ります。その日の礼拝の始めのメインである「み言葉の部」です（もう一つの頂点は「聖餐式の部」）。まず、その主日の特祷（特定の祈り）がなされます。讃美頌（その日のテーマを告げる詩篇）で予告された神の恵みが、神のみ言葉（聖書）の朗読と説教（み言葉の解き明かし）の中で、現実のこととして、今「出来事」となっていきます。そのための準備として、この短い祈りがなされるのです。

古くは、会衆が各々に小声で祈ったものと思われます。その各自の祈りが集められ、統合されていきました。そのために、この祈りは集祷COLLECTI（英語のコレクションの意）と呼ばれます。やがて、その祈りは各自の勝手な祈願ではなく、その日の礼拝が目的とする主要なテーマについての特別な祈祷に集約されていくことになりました。つまり、会衆各々の様々な願いが、その礼拝の特別な目的（神の恵みのみ業）に向かって「集められて」いったのです。この特祷の中に会衆全員の与ることになる恵み、感謝、願いが、簡潔で美しい形となって集約されました。「祈りましょう」という司式者の呼びかけによって、この祈りは共同の、会衆全体はもとより、全教会の祈りとなるのです。今日、私たちのルーテル教会はもちろん、ローマ・カトリック教会、聖

公会といった典礼教会（教会暦に基づく礼拝と聖書日課を採用する伝統的な教会）は、全世界でほぼ同じ主日を守ります。同じ祈りをし、同じみ言葉を聞いて、私たちは礼拝において、この共通のものによって、一つの民として一つの声をあげ、一つの体としてあることを認識しています。このことを忘れないでいたいと思います。

この祈祷文は、すでに3世紀からみられるもので、構成、神学内容、文体、表現等について、キリスト教文化の一つとして重んじられてきました。自由な祈祷のもつ心の息吹とは別種の、しかし練りあげられた、また歴史を越えた祈りの声があります。特別の祈りはおおよそ、次のような形態になっています。1）呼びかけの部分。2）願いの根拠となる部分。3）願いの目的・理由の部分。4）願いの部分。5）栄頌を伴う結びの部分。その日のテーマ（詩篇、旧約、使徒書、福音書）の中で示されるみ言葉に応じて祈られます。参考までに、教会暦のはじめ、待降節第1主日のものを載せておきます（日課と合わせてご覧ください）。『主キリストよ（1）、力を奮って来てください（2）。み力によって私たちを守り、罪の危険から救ってください（3, 4の統合）。あなたは父と聖霊と共に、ひとりの神であって、今もまた、永遠に生きて治められます（5）。アーメン』。日課であるエルサレムに入場される箇所（マルコ11：1等）が、この世界への主の到来として重ねられて（キリストは十字架のあがないのため降誕し、エルサレムに向かわれたのです）、人々が「主のみ名によってこられる方にホサナ（主よお救い下さい）」と叫んだように、私たちもまた、主の降誕と来臨を待つ者としてこの待降節を歩み始める、そういうテーマであることがおわかりいただけると思います。

ですから、これからも（は？）、是非その日の「特別の祈り」に注意

をしていてください。たとえ、その日の牧師の説教がトンチンカンで、さっぱりわからなくとも？、ここでテーマを聞き取ることができたら、主日礼拝の恵みを意味と目的を理解することは容易です。逆に説教者は、その日の聖書日課を勝手気儘に解釈し、いたずらに自分の好みで取捨選択したり、語りたいことのためにテーマをねじまげたり、ということは厳につつしまなければなりません。その日、み言葉を語ってくださり、福音（良き知らせ）によって奉仕してくださるのは神様なのですから。

礼拝の第一の頂点は、聖書の朗読と説教です。この聖書箇所は、教会暦に従って定められています。牧師の勝手な設定ではなく、教会の長い歴史と経験によって選ばれ形成されてきた信仰の継承ともいうべきものです。いえ、むしろこれを常に中心に置き、そのことによって公同の信仰が保持され、伝えられてきたのです。もちろん少しずつ手を加え、それぞれの時代により変更がなされてきましたが、教会暦に基づいたものという点では首尾一貫し、先にも述べたように、全世界でほぼ共通のものといえます。少なくとも、日本福音ルーテル教会は、その日、どの教会に行っても特別な場合をのぞいて同じです。

ところで教会暦とは何でしょうか。これは、「主が私たちの救いを為し遂げてくださった出来事を、規則正しい秩序だった方法で教会が祝う、年間を通じた聖日と祝祭日の暦」ということです。大袈裟に言えば、一年間で、神様の救いの歴史（救済史）を全部たどること、と言ってよいでしょう。私たちは、それを通して毎年の教会生活をすることにより、信仰のすべてに関わる事柄を多角的に、まんべんなく、秩序だてて学んでいくことになります。ですから、待降節から聖霊降臨後の最終主日までの一年を皆勤したあなた、あなたはもう立派なクリ

スチャン！なのです。

【教会暦】

ここでは、簡単に「教会暦」を説明しましょう。

主イエス・キリストは「週の初めの日」すなわち、天地創造の7日目に置かれた〈安息日（土曜日）〉の次の日に復活されました。この週の初めの日、日曜日に、教会は主の復活を祝いつづけています。つまり復活はキリスト者にとって新しい「天地創造」の始まりだとも言えるわけですが、それはともかく、この「主の復活の日」を私たちは「主日」と呼び礼拝を守るわけです。よく「聖日」とも言いますが、これはむしろ「安息日」のニュアンスが強いですから、主日で統一した方がよいような気がします。この主日の祝いの中で、教会はキリストの生涯の出来事と教えを記念しつつ、聖霊の働きのもとで、父なる神の救いの福音を新たにしていきます。

さて、教会暦では、1ケ年を単位として主の生涯（出来事と教え）が記念され、たどられつつ想い出され、神の民の生活と信仰が整えられるために、聖書の記事が「日課」として配分されます（日課については後述）。まず、暦を起算する三大祝祭日を思い出しましょう。

《復活日》（イースター）春分後の満月の次の主日、ただし、満月の日が日曜日に当たる場合は、次の主日を復活日とする。（なんてややこしいんでしょう。スパッとこの日、と決めればイースターも、もうちょっと世の中では、ポピュラーになるでしょうに、閑話休題）

《聖霊降臨日》（ペンテコステ）復活日の50日後の主日。これはおわかりでしょう。弟子たちが聖霊を受けたのは、五旬祭（50日祭＝ペンテコステ）でした。この50は、過越祭から50日目ということです。ちなみ

に復活後のイエス様は40日間弟子たちに姿を示され昇天されましたから（使徒1：3以下）昇天主日はペンテコステの一週間前に守るのです。

《聖降誕日》（クリスマス）もちろん12月25日。

この三つより、以下のような期節（季節に非ず）を設けて換算します。

〔待降節〕聖降誕日に先だつ第４の主日です。普通、11月の最後主日か、12月の第1主日より始まっています。テーマは主の降誕と来臨に備えるということ。洗礼者ヨハネやその父ザカリヤの箇所あるいは、マリアの受胎告知を中心に過ごしています。暦の色は「紫」、これは王の尊厳を意味し、高貴な色、また慎みの色でもあります。この時期は「グロリヤ」は歌わないことは前に述べました。「待降節第○主日」と呼称します。

〔降誕節〕12月25日から顕現日（1月６日）の前日までの時期。この間に「顕現主日」があります。顕現日が週日の場合、直前の主日に振り替えて祝います。クリスマスは厳密に言えば12月25日から始まるのです。ユダヤでは一日は夕方から始まりますから24日の夜から、と言ってもいいでしょう。ですから、11月には、クリスマスのデコレーションをし、12月25日には、早々とツリー等のデコレーションを片付ける、というのは噴飯ものということです。商業ベースのクリスマスはしょうがないとは言え、教会でもちらほらそういう所があるのは残念、是非1月5日まではクリスマスを祝いたいものです。暦の色は「白」、栄光の色、命の色、神とキリストの栄光を意味します。降誕後第○主日と呼称。

〔顕現節〕顕現日（1／6）から、後に説明する聖灰水曜日の前日までの期節です。顕現とは「明らかに現れる」という意味です。イエスの降誕の意味や、キリストが来られたことの意味が、私たちに顕現する

時です。毎年、顕現主日はマタイ2:1～12の博士の来訪を聞きます。これは主の到来が「異邦人に示された」ことを知るためです。その後は、主イエスご自身の洗礼（私たちの模範としてのイエス、また「これは私の愛する子」という神の言葉を聞く）、弟子の召命（私たちも従う者になることを学ぶ）と続いてゆき、顕現節最後は「変容（変貌）日」です。主の輝く姿の内に栄光が（しかしそれは十字架へ向かうという栄光）が「明らかに現れる」のです。色は、基本は「緑」、希望と成長を意味します。ただし、顕現日、洗礼日、変容日は「白」です。顕現節第○主日と呼称。

〔四旬節（受難節）〕復活日に先だつ主日を除く40日前の水曜日「聖灰水曜日」から復活日の前日までの期節です。レントと呼ばれ、復活への備えの期節あるいは主の受難と十字架を偲びつつ過ごす慎みと悔い改めの期節です。この40日間というのは、イエス様の荒野の誘惑（マルコ1:12, 13等）に起因しているのです。もともとは、復活日にのみ受洗が施されており、その直前の40日は受洗の準備期間でした。また、そこから克己（己を克する）の期節として、好物を断つなど、自分に何かを課して受難を思うということもなされてきました。今日では「克己献金」にそのなごりがあります。

四旬節の始まりである「聖灰水曜日」は、もともと洗礼志願者の準備期間の初日、悔い改める者が頭上に祝別された灰をかぶったことからこう言われます。悔い改めのしるしとしての灰は聖書の伝統に基づく（サム下13:19, ダニ9:3, ヨナ3:6, マタイ11:21他）もので、後には、信徒全員が額に灰のしるし（十字架）をつけて悔い改めを表わしました。この灰は、前年の「枝（しゅろ）の主日」に用いられた枝を燃やして作る慣わしもありました。今日の私たちの教会では、あまり

顧みられることのない日ですが、意味と主旨を考え、この期節を過ごしたいものです。そして「復活日」の直前の一週間、すなわち主イエスのエルサレムでの最後の一週間、これを「聖週（受難週）」と呼んでいます。その初めの日にあたる主日が、先に述べた「枝（しゅろ）の主日」です。言うまでもなく主のエルサレム入場と人々が枝を振ってそれを迎えたことに由来します。「特別の祈り」のところを思い出してください。待降節の始めも同じ箇所でした。これからの一週間、まさにキリストはこのエルサレムの十字架のために来られ、歩まれたということが改めて確認されるのです。（それにしても牧師泣かせの日課配分です。同じ説教を続けるわけにはいかないし…いくら何でも皆さんは4ケ月前の説教を忘れちゃいないですよネ。閑話休題）この受難週の各曜日は特に「聖○曜日」と呼ばれ特別な礼拝が持たれます。十字架の日である聖金曜日の「受苦日礼拝」、前日の洗足木曜日（ヨハネ13：5）などはご存じでしょう。また、聖餐式の起源でもある、「過越の食事（最後の晩餐）」（出エジプト12章参照）を記念し再現する礼拝も最近では行なわれるようになりました。種入れぬパンとラム肉、苦菜（にがな）とぶどう酒を用いた礼拝です。ただし、この受難週の記念礼拝（祈り）の曜日は、それが正確に聖書（福音書）の日程にあっているかどうかは、議論があります。呼称は四旬節第○主日となります。典礼色は当然「紫」、この時期はグロリアやハレルヤは慎みにより歌わないのが慣例です。

〔復活節〕復活日イースターから聖霊降臨日（ペンテコステ）の前日までの期節です。先の祝祭日のところで説明したように、このイースターとペンテコステは教会暦の基礎になります。この間の50日間は、聖書の記す期間（ルカによる時間設定）に従って定められます。つまり、

過越祭（主の十字架の日）から50日たって五旬祭（刈入れの祭）があり、人々がエルサレムに集まっていた時、弟子たちに聖霊が降った（使徒2章参照）のです。復活の主の顕現は40日間とありますから、昇天日は、その10日前、主日は、昇天日の直後の日曜日となります。典礼色は神の栄光と命の色、白を用います。復活後第◯主日と呼称します。

〔聖霊降臨後の期節〕ペンテコステより次の暦年の待降節第一主日の前日までの期節です。この日から、教会は約半年にわたって、主の教えや様々な出来事から福音を学ぶ期節として過ごすのです。それは、弟子たちに聖霊が降された後の歩み、つまり宣教を続ける教会の誕生と歩みとして、現在の私たち自身の教会の姿だからなのです。ちなみに聖霊降臨後の最初の主日は「三位一体主日」として特に父なる神、子なる神、聖霊なる神の信仰を確認する礼拝も守られるならわしです。典礼色はペンテコステが聖霊の炎の色「赤」、三位一体は「白」、その他は希望と成長をあらわす「緑」を用います。「赤」を用いるのは、この他では宗教改革記念日（いうまでもなくこれはルーテル教会だけの祝日）のような記念日だけです。記念日とは、信仰の模範となるような聖徒を通じてキリストの福音が明らかにされるよう設けられています。ルーテル教会では以下のものです。使徒に関わる日（12弟子やパウロ等）、福音書記者に関わるもの、信仰や殉教に関わるもの（マリアや驚くなかれ「ミカエルと天使の記念日」なんてものもあります。）がありますが、詳細は教会手帳の日課カレンダーをご覧ください。ほとんどがウイークディになりますので、これらを守る礼拝は一般的ではありませんが、覚えてはおきたいものです。

さて、延々と教会暦の説明をしましたが、これに基づいて聖書の日課は選ばれています。主日の三つの聖書箇所は、決して、くじびきで

偶然に、あるいは説教者の勝手で選ばれているのでもありません。すべて、この信仰生活の四季（期節）、教会暦に従って学びを深めるためです。常に注意深く、詩篇、主日の祈り、三つの日課等の関わりと意味、礼拝のテーマに思いをはせていただければと思います。もちろん、福音書が中心であり、現在は、毎年一つの共観福音書（マタイ、マルコ、ルカのいずれか）を通読し、それぞれを補う形でヨハネ福音書がちりばめられています。3年周期で回っていることになりますから、3年間、礼拝に皆勤したあなた、あなたはもう、立派な礼拝オタク、いえ福音書の（一応の？）通読者になったわけです。

【聖書朗読】

旧約聖書、使徒書の朗読

司〕　本日の初めの朗読は○○書○○章○○節から始まります。
　　－－（初めの日課）－－　　日課を終わります。

司〕　本日の第二の朗読は○○書○○章○○節から始まります。
　　－－（第二の日課）－－　　日課を終わります。

ハレルヤ唱または詠歌　〈福音の朗読に備えて一同起立をします〉

全〕　ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ。
　　＃四旬節、受難週には特に次の詠歌を用いる。

全〕　キリストは おのれを低くして、
　死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで み旨に従われた。

福音書または主要日課の朗読　〈福音を一同起立して聴きます〉

司〕　本日の福音は○○書○○章○○節から始まります。
　　－－（日課）－－本日の日課を終わります。

「特別の祈り（主日の祈り）」より礼拝は「みことばの部」に入りま

した。私たちの教会は現在、三つの聖書箇所（旧約、使徒書、福音書）を読んでいます。ただし、復活節だけは第一番目の朗読として、使徒たちのイエス様の復活後の証言（主に使徒言行録の箇所）が読まれることになっています。

【旧約の朗読】

イエス様自身が、安息日にシナゴク（ユダヤ教の会堂）で礼拝をされました（マルコ1:21, ルカ4:16等）。そこでは、律法と預言、私たちが言う旧約聖書が読まれ教えられました。この朗読と解説は主要かつ自明なこととしてキリスト教会の礼拝にも引き継がれました。初代教会の礼拝では、聖書朗読として、律法・預言・書簡（使徒書）・使徒言行録・福音書に加え、知恵の書（旧約の箴言や読編の諸書）もあったそうです。（いやはや大変ですね。これからすると三つでよかった?!）

やがて、だんだん、新約の比重が高まり、325年ニヤケ会議（イースターや四旬節（受難節）が定められ、「ニケア信条（の原型）」が告白された会議）の前後には、旧約・使徒書・福音書の朗読がなされるようになりました。しかし、その後、旧約の比重が低くなり、長く、使徒書、福音書の二朗読時代がつづきました。再び、旧約が回復されたのは、比較的最近のことです。現在では、旧約聖書の日課は、福音書に関連して選ばれます。暗に差し示したり、はっきりと確認したり、あるいは対照的に示すことによってその日のテーマを強調します。あまり、馴染みない箇所だったりしますが、福音書と共に注意深く関連付けて読んでみてください。旧式文では、「旧約聖書の日課は…」と言っていましたが、必ずしもそうとは限りませんので、新式文では「第一朗読は…」と言うようになりました。この朗読に対して、旧式文では、

「神に感謝をささげん」と応答しました。聖なるみ言葉への感謝の表明ですが、これはユダヤ教の会堂礼拝の時代から、会衆が聖書朗読の応答として詩篇を歌っていた習慣をうんと簡略化して残してあるものです。

【使徒書の朗読】

二番目は使徒書（パウロその他による書簡）が用いられます。これは、その日のテーマに則した箇所の選択が基本となりますが、むしろ、一つの書簡（ローマ書ならローマ書）を中心に通読することを主眼に選ばれています（特に聖霊降臨後の時節に）。使徒書の内容は、教訓・教理・信仰の勧めなどが中心ですから、言ってみれば、どこでもテーマに関連するとも考えてよいでしょう。

【ハレルヤ唱または詠唱（グラジュアル）】

使徒書の日課に引き続き、旧式文ではグラジュアルと呼ばれる詩篇歌とハレルヤ唱が歌われました。聖書日課に関連した、このグラジュアルはしかし、今日の礼拝ではほとんど用いられません。その代わり、後の「説教」の前で歌われる讃美歌がそれにあたります（次項詳述）。

さて、これはとても複雑で説明が難しいのですが、簡単に言うと本来グラジュアルとは、グラードゥスGradus（階段）で歌われたのでこう呼ばれるようになったと言われています。式の中で説教者が、ここで説教壇に登る時の歌だったのです。西欧の教会を見ますと大きな階段で登る聖壇と説教壇が目につきますが、そこにエッチラオッチラ登る間に聖歌隊によって歌われた詩篇歌（その日のテーマに応答する）が、グラジュアルでした。もっとも、語源としては、グラダーレGradale（美しい）＝その日の典礼歌の中で最も美しい歌が用いられた

から、という説も有力です。ともあれ、この詩篇歌に、会衆が応答したのが「ハレルヤ（主を賛美せよ、の意）唱」です。ですから、本来は、ここでの「ハレルヤ唱」は聖書朗読後の応答歌（グラジュアル）の一部だったのですが、現在は、むしろこれが独立して用いられているのです。そして、福音書朗読の準備として意識されるようになってきました。また、先にも述べましたが、ハレルヤは喜びの表現なので、四旬節（受難）期間中は、この言葉は典礼から省かれるのが一般的です。代わりに「キリストはおのれを低くして…」というフィリピ2:6以下の有名な「キリスト詠唱（頌）」が用いられます。

【福音書の朗読】

次に、旧式文では「主に栄光あれ」と唱えながら、起立をして福音書朗読に備えました。福音書こそが主の言葉と教えそのものですから、「み言葉の部」の頂点はここにあります。会衆一同がここで起立をするのはすでに4世紀には一般化していました。よく、礼拝で立ったり座ったりが煩雑で面倒だ、という声を聞きますが、本来、礼拝で絶対に起立すべきなのは、わずか二ケ所だけと覚えておくと便利です。この福音書朗読と、聖餐式の中の「設定辞」（牧師がパンとぶどう酒の聖別をする時）だけなのです。必ずこの二つだけ起立するのは、これが礼拝の中の中心部分だからです。これを逃したら取りかえしがつきませんよ、という「居眠り防止」のためです。逆に言えば、他は座っていてよい、いえ、寝込んじゃってもいいですよ、ということです。いつも、説教中、牧師の退屈な話でついウトウト！（または熟睡？）、でも大丈夫！朗読の時は、起立させられしっかり起きていますから、み言葉を聴き逃すことはないのです。

福音書が、その日の礼拝の前半の中心であり、主ご自身の言葉と行為の出来事そのままですから、朗読者は間違えないように注意深く取り組みたいものです。乱暴に言えば、「説教」は間違えても退屈でもトンチンカンでもかまわないが、み言葉（聖書）の朗読はそうでは困る、のです。殊に福音書は。ですから昔から特別な作法を伴ってきました。礼拝行進をしたり、香をたいたり、十字を切ること、起立をしたり、朗読前後の交唱語句の合唱等です。私たちの式文では、後の二つだけが残されているわけです。

ところで、前にも触れましたが、聖書朗読について一言。朗読と共に会衆が聖書を黙読するのは日本の教会の素晴らしい習慣ですが、その時になって、ガサゴソと箇所を捜し始めては間に合いません。何のための朗読か、それは「聞く」ため、み言葉に耳を傾けるためです。初めての方も、皆さんが静かに耳を傾ける姿に教えられることも大きいでしょう。あるいは、箇所は事前にわかっているのですから、礼拝前に準備しておき、その時に見せてあげる、ということができればなお素晴らしいと思います。朗読の当番の方も、大切な務めなのですから直前にあわてないで、一度下読みをしておくだけでずいぶん違うでしょう。

【讃美歌＝み言葉の歌】

みことばの歌　　＃讃美歌、詩篇、グラジュアルのいずれかを用いる。
司〕　本日のみことばの歌として、〇〇を歌いましょう。

福音書朗読に引き続き、説教に先だつ讃美歌が歌われます。ここで

歌われるものが、その日の礼拝のうちでは最も重要な役割を担う讃美歌です。前項で説明したグラジュアル・ハレルヤ唱が発展・独立したもので、その日の聖書日課、み言葉の中心テーマと結び付く歌です。読まれた聖書の中に、神の言葉を聞きつつ、思いをめぐらし、説教に備えます。ですから、この讃美歌は、好き嫌いや、歌える歌えないではなく、説教と結び付くふさわしいものが選ばれなければなりません。どうか、これから、この讃美歌を歌うとき、やれ一息つけるとボーッとするのではなく、歌詞によく耳を傾け、大声で讃美してみてください。説教者は、この讃美歌の選出から説教を始めているのだ、ということがよくおわかりになるはずです。

【説　教】

説　教	#（説教者は初めに）私たちの父なる神と主イエス キリストから恵みと平安とが、あなたがたにあるように。 #（説教者は終わりに）（一）人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト イエスにあって 守るように。（二）望みの神が、信仰からくる あらゆる喜びと平安とを あなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを望みにあふれさせてくださるように。 # その他、エペソ3：20、同6：23、ピリピ4：19等を用いることができる

続いて「説教」が行なわれます。説教は、ユダヤ教の集会から受け継いだものでもあります。イエス様も聖書の朗読の後に、その教えを話されました（マルコ1：21、ルカ4：21等）。そして使徒言行録でも明らかなように、初代教会の時代から教会に不可欠な宣教上の行為でも

ありました。いえ、新約の書簡自体が説教だったともいえるでしょう。ところで、皆様は「説教」とは何か、と問われたら何とお答えになるでしょうか。神の言葉？聖書の解説？牧師の講演？（昼寝の時間!?）、その内容は極めて幅広い事項を内包しています。神の言葉の説明、解釈、預言、証言、教訓、勧告、讃美、告白等々に関わる幅を持っているのです。ルーテル教会が、説教を礼拝の重要な位置へと回復したことが、宗教改革の特色の一つであり、今日、礼拝の中心が説教と理解されています。しかし、これはそれほど自明のことではありません。

説教を礼拝の中心に回復したことが、宗教改革の特色である、とは今日一般的に言われていることです。初代教会の時代から説教がされてはいましたが、その重要性から逆に、5世紀頃には、それは司教（監督＝ビショップ）のみに許される特権的行為と理解されるようになりました。一般の司祭（牧師）には畏れ多いものとなったのです。やがて、礼拝の比重が聖餐に移り、説教は衰退していきます。その背景と原因は、キリスト教の公認・公教化により、教会が短期間に拡大し、説教者の質と量に諸問題が生じたこと、同時に相継ぐ異端問題の発生が関係しています。全員が聖書を手にして、自由に読める時代ではありませんから教理的な面の統一、信仰の保持と継承は、大変困難なことでした。まさに「礼拝の法は信仰の法（【はじめに】を思い出してください）」だったのですが、真っ当な説教者を得るのが困難なため、目に見える言葉、キリストの体と血であるパンとぶどう酒（聖餐）に与ることが礼拝（ミサ）の中心となりました（やがてそれもパンだけになりました。＝液体はこぼしやすく粗相をしやすいから）。やがて、それは神秘的な、また魔術的な理解さえされるようになります。そんな中、M・ルターが改革の第一の課題として取り組んだのが目に見えない言

葉、耳で聞き理解する信仰の言葉の回復でした。その意味で宗教改革は「説教運動」であったと言えるでしょう。ルターによる正しい信仰理解、福音の回復・再発見を学び、それを携えた若き教え子たちが、各地の教会の説教壇の上から、それを語り始め、私たちのルーテル教会が立てられていきました。説教は、そのような歴史と位置づけの中で、礼拝の中心、不可欠な要素としてなされてきました。それは聖霊の導きのもとで、説教者自身と宣教の共同体である教会員の、み言葉にかかわる相互の研鑽と祈りによって説教が説教として、教会の業、神の言葉として保持されてきたのです。

私たちの教会は、聖餐（聖体）のもとにキリストの現臨を見ますが、それは同時に、み言葉が伴って初めて聖餐（聖体）であると理解し、信仰を通して受け取ります。聖餐と聖書の日課を取り結ぶ接点に、神の言葉（福音）の現在化としての説教があります。ですから、確かに説教は牧師が語り、耳に聞こえて来るのは人間の声ですが、教会の典礼（礼拝）において行なわれるものは、神の言葉、語りかけとして受けとられるのです（伝道推進センター編「教会ってどんなところ」4頁参照)。説教の前後の祝福の祈願は、多くは使徒書の語句により、新式文の始まりのものは、「私たちの父なる神と…」はエフェソ1：2。締め括りのもの（一）（「人知では…」）はフィリピ4：7。（二）は、ローマ15：13。この他、エフェソ2：20、Ⅰテサロニケ3：12, 13、Ⅱテサロニケ2：16, 17、同5：23, 24、ヘブライ13：20, 21等が用いられています。

【感謝の歌】

み言葉への感謝と応答の歌が歌われます。時間の都合で省かれる場合もありますが、説教の主題に対応して、ふさわしいものが、私たち

の決意表明として歌われるのが望ましいと思います。

【信仰の告白】

信仰の告白（一・ニケヤ信条）

（イ）

司〕　ニケヤ信条によって信仰の告白を共にしましょう。

全〕　天と地、すべての見えるものと 見えないものの造り主、全能の父である唯一の神を私は信じます。

唯一の主 イエス キリストを 私は信じます。主は神のひとり子であって、すべての世にさき立って父から生まれ、神の神、光の光、まことの神のまことの神、造られたのではなく、生まれ、父と同質であって、すべてのものは主によって造られました。主は私たち人間のため、また私たちの救いのために天から下り、聖霊により、おとめマリヤから肉体を受けて人となり、ポンテオピラトのもとで私たちのために十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書のとおり三日目に復活し、天に上られました。そして父の右に座し、栄光のうちに再び来て、生きている人と死んだ人とをさばかれます。その支配は終わることがありません。

主であって、いのちを与える聖霊を私は信じます。聖霊は父と子から出て、父と子とともに礼拝され、あがめられます。また、預言者をとおして語られました。

唯一の、聖なる、公同の使徒的な教会を私は信じます。

罪のゆるしの唯一の洗礼を私は受けいれます。死人の復活と来たるべき世のいのちを待ち望みます。　（アーメン）

（ロ）

司〕　ニケヤ信条によって信仰の告白を共にしましょう。

全〕　われは唯一の神、全能の父、天と地、すべて見ゆるものと見えざるものの造り主を信ず。

われは唯一の主イエスキリストを信ず。

主はよろず世のさきに、父より生れたる神のひとり子、神よりの神光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずして生まれ、父と同

質にしてすべてのものは主によりて造られたり。主はわれら人類のため、また、われらの救いのために天より下り、聖霊によりておとめマリヤより肉体を受けて人となり、われらのためにポンテオピトラのもとに十字架につけられ苦しみを受けて葬られ、聖書に従い三日目によみがえり、天に上り、父の右に座したまえり。また生ける人と死にたる人とをさばくために、栄光をもって再び来たりたまわん。そのみ国は終わることなし。

われは主にしていのちの与え主なる聖霊を信ず。聖霊は父と子とよりいで、父と子とともに拝みあがめられ、預言者によりて語りたまいし主なり。

われは唯一の聖なる使徒たちより伝わりし＊キリスト教会を信ず。

われは罪のゆるしのための唯一の洗礼を信認す。死者のよみがえりと来世のいのちを待ち望む。　（アーメン）

＊印は「公同教会」としてもよい。

信仰の告白（二・使徒信条）

（イ）

司〕　使徒信条によって信仰の告白を共にしましょう。

全〕　天地の造り主、全能の父である神を私は信じます。

そのひとり子、私たちの主イエスキリストを、私は信じます。主は聖霊によってやどり、おとめマリヤから生まれ、ポンテオ ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、陰府（ヨミ）に下り、三日目に死人のうちから復活し、天に上られました。そして全能の父である神の右に座し、そこから来て、生きている人と死んだ人をさばかれます。

聖霊を 私は信じます。また、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。（アーメン）

（ロ）

司〕　使徒信条によって信仰の告白を共にしましょう。

全〕　われは、天地の造り主 全能の父なる神を信ず。

われは、そのひとり子、われらの主 イエス キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府（ヨミ）に下り、三日

目に死人のうちよりよみがえり、天に上り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりたまいて、生ける人と死にたる人をさばきたまわん。

われは、聖霊を信ず。また聖なる＊キリスト教会・聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、限りなきいのちを信ず。（アーメン）

＊印は「公同教会」としてもよい。

＃堅信式が行なわれる礼拝では、「信仰告白」は、これを堅信式のなかに移して行なう。

―― 洗礼式、堅信式その他の諸式（別掲）は、ここで行なう ――

説教・感謝の歌に引き続き、信仰の告白がなされます。み言葉に対する私たちの応答です。新式文では、説教の後、つまり「みことばの部」の締めくくりとして唱えられるようになりました。旧式文では、福音書朗読後、み言葉の歌と説教の前に置かれていました。これは福音書に直接応答するか、説教も含めたみ言葉全体に応答するかの重点の違いです。そして、これは、神に対して、というものでもありますが、むしろ、私たちは「かく信ず」という、共同体における信仰の一致の確認と、世界への表明という性格の方が強いのです。別に、神様にいちいち「信仰の表明」をしなくても、常に神は神であられるわけですし、教理を教える必要もありません。むしろ、この信仰において我らは集い礼拝し、み言葉に生きています、という確認と宣言なのです。今、私たちは「使徒信条」「ニケヤ信条」という古典信条（キリスト教会の初期から共有されてきたもの）を唱えていますが、ふさわしいものがあれば、これと共に、または代えて別の告白がされてもかまいませんし、そうする必要もでてくるでしょう。日本福音ルーテル教会宣教百年の時の「百年信仰宣言」はその一つの例でした。

とは言え、勝手に、任意に、その時の気分で、というのでもありま

せん。共同性、共有性が重要なのは先に述べた通りです。私たちは、二つの古典信条によって、私たちの教会が、その信仰が、聖霊降臨からつながる、「使徒的な（ニケヤ信条）」ものであることを確認し、全世界のキリスト者と共に告白します。ですから、今日、キリスト教の教派も無数にあり、厳密に言うと変なもの？と思えるような様々な教会があってどれがどうと簡単には判断つきかねる時、この信条を共有しているかどうか（他に何を告白しているかはもちろん大切ですが）、本当にこの「告白」を共にできるかが、一つの目安になるということもできると思います。では、簡単に二つの信条について。

【使徒信条】

原文（ラテン語）が12の文になっていることから、12使徒が伝道に赴く際、もしかすると聖霊降臨日に！、全員が一句ずつ持ちよって、正しい公同の信仰の要約として作ったもの、という伝説が生まれました。もちろん、歴史的にはそうではありませんが、その内容、また用語において、聖書的・使徒的であることには間違いなく、「使徒信条」と呼びならわしてきました。口語訳聖書、使徒行伝8：37に「わたしは、イエス・キリストを神の子と信じます。」という洗礼の時の言葉があります。新共同訳では、＊印がついて巻末に載っています。実はこれは、本来の古い原本にはないものを書き加えた箇所と思われているのですが、洗礼の場面ですから、当時されていた洗礼の時の言葉、告白がここに挿入されたのかもしれません。そういえば、37節のものは、使徒信条の第二段落の冒頭に似ています。つまり、この信条は本来、洗礼を受ける時の告白、信仰の基準を言い表わすものでした。文献としては4世紀に残されている「古ローマ信条」で、2世紀初頭から、つまり新約聖書

とほぼ同じ時代から用いられていたものが、やがて普遍的な形に整えられ、今日のものとなりました。ですから、「私は信じる」という主体的な告白の調子になっています。私たちの洗礼式での告白もこの信条が用いられるのは言うまでもありません。そして、礼拝でも、私たちがこれを声を合わせ、心を一つにして唱えるのは、いつも自らの洗礼、罪の赦しと再生の喜びを確認し、感謝しつづけていくということなのです。

さて、現行の訳があまりにも普及していますので、変更には少々とまどいもあるでしょうが、新式文には（そしてルーテル教会の全信仰告白をまとめた「一致信条書」にも）口語訳も載せられています。少しずつ、普及していけばよいと思われます。ところで、古い訳で唱えますと、ともすれば「われは天地の造り主、」で一息入れることになり、私が神様（われは造り主）となってしまって、落ち着かないのは、私だけでしょうか？

【ニケア信条】

「使徒信条」が、洗礼式のための個人告白用に、また自然発生的に教会で唱えられるようになったのと比べ、「ニケア信条」は始めからはっきりした誕生と性格を持っていました。キリスト教が約250年の迫害の時代を乗り切り、ローマ帝国のコンスタンティヌス帝によって公認されたのが313年のことです。外からの迫害の時代が終わると共に、教会は直ちにもう一つの戦い、すなわち教会の中での「異なる福音・違う教え」と対決しなければなりませんでした。アレキサンドリアのアリウス司教は、御子キリストは父なる神と、完全な意味で同じ神性を保つのではない、とキリストの神性を否定しました。それは教会の分裂

の危機を招きましたし、公認されたばかりのキリスト教が分裂することは教会自体にとってはもちろん、時の政治にとっても好ましいことではありませんでした。

そこで、この問題に決着をつけるため、自らを「教会の外にいる司教」と自任するコンスタンティヌスは325年、ニケア（現在のトルコ領イスニク＝イスタンブールの東70ｋ）に最初の公会議を招集しました。迫害の時代から広大なローマ帝国の領土のすみずみへ、そしてそれを越えて伝道されていったキリスト教でしたが、この時初めて、当時の全世界の教会代表者（司教や神学者）が一堂に集い、公の教会総会「公会議」が開かれたのです。ちなみに、この中には、後のサンタクロース伝承となるニクラウス司教もおりました。このニケア公会議の結果がステイトメントとして公に宣言されました。それがいわゆる「原ニケア信条」です。

今日のニケア信条とは終わりの部分が違っていて、そこに先の異端的教えであるアリウス派の主張をあげて、それを否定し非難する文章が記されていました。そんなわけで、第二パラグラフの「…キリストを信ず」のところが他に比べ詳しくなっているのです。そして、381年のコンスタンティノポリス公会議で今の形に近く改訂され、451年のカルケドン公会議で再確認されました。つまり、この信条は、異なる教えに対して、自らの信じるところを明らかにし、公の共有する信仰を確認し、教会の内外に告白したものなのです。教会が、公式に認めた、最初の信仰内容・教理の宣言文でした。その意味で、今日の教会一致運動（エキュメニカル）の見地からも重要です。

また、これは、もともと（ギリシャ語）は「我々は信ず」と主語が複数形になっていました。それが礼拝の中で用いられる際（ラテン語）

に、「我は…信ず」と個人の主体的な告白形になっていきました。私個人は、その発生の経緯からも、また性格上も、公同の礼拝の中で告白する「信条」として、本来の複数形で唱えてもよいのではないかと思っています。また、現在、多くの教会では、教会暦の祝祭日や聖餐式のある礼拝では「ニケア信条」を、それ以外の時は「使徒信条」を唱えているところが多いようです。別に規則があるわけではありませんが、公的な礼拝における信仰告白としては「ニケア」が一般的です。（ミサ曲の「クレド」（信条）も、これに作曲されています。）でも「使徒」の方も、冒頭にあげたように洗礼信条ですし、小教理問答書等でなじみのものでもあり、いつも基本に立ち帰るということからも、礼拝の中で共に告白していくことは大切なことだと思います。

3. 奉 献 の 部

【奉献唱】

祝福の挨拶

司〕　主が 共に（おられるように）。

衆〕　また、あなたと共に。

奉献と奉献唱

司〕　主にささげましょう。

＃奉献の際に、聖餐のためのパンとぶどう酒が聖卓に運ばれてもよい。（その場合には24「設定詞」は（二）が用いられる。）

＃奉献唱は、奉献の際に、または奉献の後に、いずれで唱和されてもよい。また、他の奉献歌に変えてもよい。

（奉献唱）

全〕　神よ、私のために、清い心を造り、
ゆるがぬ霊を 私のうちに 新しくしてください。
私を あなたの み前から捨てず、
あなたの聖なる霊を 私から取り去らないでください。
あなたの救いの喜びを 私に返し、
喜び仕える霊を与えて、私を支えてください。

信仰の告白が終わると「祝福の挨拶」が交互になされ新しい段階に入ります。新式文では、説教の後で「感謝の歌」が入り、み言葉（説教）への応答があり、続けて「信仰告白」となりました。「みことばの部」全体に対する応答と感謝、信仰の表明ということが強調されます。ここから礼拝は後半部と考えてもよいでしょう。礼拝の前半部において示された神の恵みと愛に対する私たちの応答として、私たちは、自分自身と賜わっすべてのものを献げるのです。これも、聖書の時代にさかのぼれる信仰の行為で、古くは、パンとぶどう酒を中心にその他様々な食物、物品、衣類、財産目録等にわたる奉献が、信徒の行列を

伴って行なわれました。もともと、ここで献げられたものの一部が聖別されて聖餐式に用いられ、他は、聖職者や病人、貧しい者の生活の糧のためでした。貨幣経済への移行に伴い、物品からお金に変化しても、その基本は変わらないでしょう。もちろん、大切なのは、奉献とは、ただ有り余る中からその一部を献金する、のではなく、神にすべてを与えられたその恵みへの、感謝の自己奉献であることです。その気持ちを込めて臨みたいものです。あの貧しいやもめの2レプトンの献げ方（マルコ12:41以下）の通りです。ですから、この奉献のためには準備が必要です。過ぎた一週間を省みつつ、礼拝の開始前までにその備えをすべきでしょう。その時になってガサゴソあわてて、ポケットのほこりと共に何枚かの硬貨を籠に放り込むというのは（誤解のないように、金額の大小ではなく、その心備えという意味で）避けたいものです。

そして、この奉献の行為と共に、またはその後で「奉献唱」が唱えられます。詩篇51:10以下の言葉を基にしたもので、自己献身、清い心、直き霊、救いの喜びの回復の願いが歌われます。この後、旧式文では「祈り」に入りました。いわゆる「教会の祈り」の部分ですが、これは続く「聖餐の部」との関わりで、また礼拝の歴史から見ても大きな問題を含む箇所となります。

奉献は、歴史的には、聖餐と堅く結び付いた行為でした。ミサとは「記念」ということですが、主イエスの記念＝十字架の出来事、最後の晩餐で設定された聖餐式のこととなりました。主がご自身を私たちのために捧げられたこと、その体と血（パンとぶどう酒）による犠牲を、くり返し記念しその恵みに与ることがミサ＝礼拝の中心です。「奉献」はまさに主の犠牲の行為が起源です。ですから、ここで捧げられたも

のの中から、パンとぶどう酒だけが聖別されて聖餐式に用いられたり、今日でも、ここでパンとぶどう酒が献金と共に聖卓に運ばれる習慣も残っています。

ところで、ルターは、この「奉献＝キリストの犠牲」という奉献理解に、新しい意味を付け加えました。それはむしろ「犠牲」であるより「(私たちの) 自発の供え物」、喜びの応答であり、告知された福音への感謝行為でもある、としたのです。「自分の体を神に喜ばれる聖なるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です（ローマ12：1)」。こうして奉献は私たち自身を神に委ねることの象徴となり「奉献唱」の内容となったのです。

【奉献の祈り】

奉献の祈り　　＃他の「奉献の祈り」に変えてもよい。

司〕　祈りましょう。

あわれみ深い神よ。

あなたは、私たちに 恵みと愛のしるしとして、私たちの思いを越えた多くの賜物を日ごとに備えてくださいます。私たちは 私たち自身と賜わったすべてのものを 喜びと感謝をもってささげます。

私たちのために ご自身をささげられた主イエス キリストのゆえに、私たちのささげるすべてを受けいれてください。

あなたと聖霊とともに とこしえに ただひとりの神であり、世の終わりまで生きて治められるみ子 主イエス キリストによって祈ります。

＃聖餐が行なわれないときは、31「ヌンクディミティス」または32「教会の祈り」へ続く。

旧式文では、奉献唱に引き続き「教会の祈り」に入っていましたが、実はこれは歴史的に見て色々な問題というか、混乱のあったところで

す。わかりやすく説明すればこうなります。古く6世紀頃までの礼拝では、奉献をはさんで二つの祈りが置かれていました。一つは、奉献の前に置かれ、すなわちみ言葉の部の最終部となる「教会の祈り（信徒の祈り、共同の祈り）」と呼ばれる祈祷でした。もう一つは奉献の後に置かれる「奉献の祈り」です。この二種類の祈祷配置は、礼拝に集う、信者・未信者の区別を明確にしていたことによります。もともと礼拝において未信者が列席を許されたのは「み言葉の部」までで、奉献から後の「聖餐式」は信者のみに許される「秘儀」でした。サクラメント（礼典）とはもともと、この秘儀という意味です。ですから、奉献の前に、言いかえると、この「教会の祈り」によって未信者は退場していたのです。その後、この祈りが廃止されていくのですが、それは、未信者の退場がなくなったため（なにしろ中世に入りキリスト教化が進み会衆全員が信徒となったため）と、奉献行列（前項参照）がなくなった（同じく信徒数増大のためできなくなった）ために、典礼（礼拝）上、連続する祈祷が整理されたのです。結果として聖餐式に関わる「奉献の祈り」だけが残りました。

ところが、当時のこの奉献の祈りは、「聖餐における犠牲」のみの強調でしたから、先にあげたルターや、他の主張により、従来の祈りの代わりに「共同・教会の祈り」が復興され組み入れられました。しかし、み言葉の部と聖餐の部の一貫性を考えるとき、終結部的な性格をもつ「共同・教会の祈り」が、この二つを中断する異和感を残してきました。日本では、異教社会における特質から「聖餐を伴わない礼拝」が一般的でしたから（つまり、初期の時代の未信者が退場するまでの礼拝）、奉献直後の「教会の祈り」が容認されてきました。事実、旧式文の礼拝で、聖餐を伴わない時は、この後にすぐ「祝福」があり、礼

拝が終わりになります。

さて、ここで問題だったのは、この「教会の祈り」と「奉献の祈り」が旧式文の礼拝では混乱してしまったことです。特に、献金を信徒が集め、聖壇にもって行き、そこで代表して祈るということが習慣になり、感謝の初穂の祈りとしての奉献である祈りと、み言葉への応答や牧会的な祈り（教会のための祈り、会員の動向等への祈り）が混在したり、あるいはどちらかが欠落したりしています。旧式文では、奉献の祈りが省略された形になっていました。新式文では、ここに奉献の祈りを回復してこれを明確化し、新たに礼拝の最後に「派遣の部」を設けて共同・教会の祈りを置いています。

なお、「奉献の祈り」は、ここにあげたものの他に、（二）、（三）（式文のB、Cの該当部分参照）が用いられますが、他のふさわしいものにかえてもかまいません。

4. 聖餐の部

【聖餐の歌】

聖餐の歌　　＃讃美歌を用いる。（この歌は省いてもよい）
司〕　聖餐の讃美歌〇〇を歌いましょう。

聖餐を伴わない日の礼拝は、先に述べたように、奉献と祈りの後に派遣の部に移り、ヌンク ディミティス、教会の祈り、主の祈り、ベネディカムス、祝福で礼拝が終わります。しかし、本来は「聖餐式」こそ礼拝の中心であり（み言葉の部と二本立てとは言いますが、こちらが本来のメインにあたります）、これがない礼拝の方が特別なのです。教会によっては省略されることもありますが、ここで「聖餐の歌（讃美歌）」によって、新たな部分に入ります。伝統の中で生まれた聖餐式用の讃美歌や、当日の日課主題や教会暦との関わりで選ばれたものによって、会衆は、聖餐式のために、心を整え、備えます。

【聖餐序詞】

序　詞
司〕　主が共に（おられるように）。
衆〕　また、あなたと共に。
司〕　心をこめて 主を仰ぎましょう。
衆〕　主を仰ぎます。
司〕　主に 感謝しましょう
衆〕　感謝は ふさわしいことです。

ここで、それぞれみ言葉の部、奉献の部に入る際に交された「祝福の挨拶」が唱えられますが、聖餐の部の導入としては、挨拶に続き、二つの「応答句Dialogus」とからなる特別な三つの交唱の形をとります。なお、ここで用いられている旋律は、他の挨拶の旋律とは異なる特別な、ほぼ2世紀にさかのぼることのできる歴史的なものです。

聖餐の部への導入の序詞が「祝福の挨拶（主が共に…）」と二つの「応答句（こころをこめて…）（主に感謝しましょう…）」とからなり、今私たちも使っている旋律が、2世紀にさかのぼるものであるということは、既に、2世紀には（つまり紀元100年代という最初期には）今日の聖餐式の形は、ほぼ整っていたということです。逆に、私たちの聖餐式は、キリスト教の始まりからの不変の典礼行為だと言えます。初期のキリスト者にとり、ユダヤ教のシナゴグでの律法（旧約聖書）朗読とその解説、または、そこでなされるキリスト証言（説教）は、極めて自明かつ当然のこととして受け継がれました。それが礼拝式の前半部（説教まで）であることは今まで述べてきた通りです。しかし、彼らが週の初めの日、つまり主の復活日にあたる日曜日に、ユダヤ教の安息日であった土曜日から日を移して、「一緒に集まって」「パンをさく」ことは、キリスト者の独自のものとして、極めて意識的に守られるものとなりました。それが、この序詞の三つの交唱の三番目の言葉にある「感謝（ユーカリスティア）」と呼ばれる聖餐式を中心とした礼拝（典礼）です。礼拝式後半（奉献から後）の誕生です。ですから、本来、キリスト教がキリスト教であるための礼拝は、この聖餐式を抜きにしては成り立たないものである、という原則を改めて確認しておかねばなりません。今日、様々な理由で、必ずしも毎週聖餐式が行なわれるわけではありませんが、私たちの礼拝理解において大切なことは、

説教と聖餐のいずれが重要であるか等の比較問題ではなく、「見える言葉（パンとぶどう酒としてのキリスト）」と「見えない言葉（説教＝聖書）」の一元性、言葉と聖体の一貫性のもとに福音・救いの現実化を観るということです。キリスト者がその始めから、宣教・洗礼・聖餐を一連のものとしてとらえていたこと、そのことが、短い中ではあっても、今の私たちの礼拝式に正しく反映し位置づけられているのです。応答句の「心をこめて主を仰ぎましょう－主を仰ぎます」は哀歌2:41、次の「主に感謝しましょう－感謝はふさわしいことです。」は、主の最後の晩餐（言うまでもなく聖餐式の基礎）＝出エジプトを記念する「過越の食事」で行なわれた感謝の祭儀から引き継いだものと思われる神の祝福への応答句です。

【その日の序詞】

その日の序詞

司〕　いつどこででも－－－－（特別序詞へ続く）

＃特別序詞は、その礼拝が属している教会暦期節のものを用いる。

待降節	16頁	降誕節	16頁
顕現節	16頁	四旬節	16頁
受難週	17頁	復活節	17頁
昇天祝（主）日	17頁	聖霊降臨祭	17頁
通年・特に聖霊降臨祭以後の主日			18頁
三位一体祝日	18頁	使徒記念日	18頁
全聖徒記念日	18頁		

（結びの句）

－－－（特別序詞）－－－今、地にあるすべての教会は、あなたのみ名をあがめ、永遠の讃美を天にある天使の軍勢と共に声を合わせて歌います。

「感謝はふさわしいこと」という序詞に続いて、神への感謝の表明が導入句と共に唱えられます。司式者の「いつどこででも、あなたに感謝するのは、当然であり、また、ふさわしいことです。」に始まり、特別序詞（「その日の序詞」）が続きます。その日の感謝の理由が述べられますが（適用句）、その内容は、キリスト・イエスのみ業をたたえるものです。つまり、その主日に聞いた日課や、その時期過ごしている教会暦に従って、キリストのみ業についての感謝（＝聖餐）の根拠が説明されます。ですから、この特別序詞が、聖餐における聖体と、み言葉の部の聖書を橋渡しする説教的な役割を担っているといえるでしょう。これも古くから定式化されてきたもので、多いときは200以上にも及んだといわれています。カトリック教会では14が早くから選定され、その後も追加と削減が繰り返されたそうです（現在は20）。ルーテル教会では、旧式文では9つ、新式文では12定詞になっています。この特別の言葉（感謝の説明）に引き続き、固定された結語「今、地にある全ての教会は、あなたのみ名をあがめ……」という伝統的な締め括りから、次の「サンクトゥス（聖なるかな）」へと移ります。ところで、旧式文では、祝祭期でない時は、適用句が省かれることになっていましたので、この特別序詞の導入と結語だけになることがありました。そうすると、最も大切な「その日の序詞」適用句がなくなり、これでは、感謝の理由部分を省くことになり、重要な聖餐の意味の説明を欠くことになります。新式文では改善され、必ず特別定詞を唱えるようにされています。

【サンクトゥス（とベネディクトゥス）】

サンクトゥス（聖なる）　〈設定に備えて一同起立をします〉
全〕　聖なる 聖なる
聖なる 万軍の主。
主の栄光 天地に満つ。
天にはホサナ。
主のみ名によって来られるかたを たたえよ。
天にはホサナ。

感謝の讃歌としてここで用いられる詞は、前半のサンクトゥス（聖なるかな）がイザヤ書6:3から取られた天使たちの歌で、後半のベネディクトゥス（恵みあれ）は詩篇118:26からとられています。殊に後半の「主のみ名によって来たるものに恵みあれ、いと高きところにホサナ」は、主イエスの最後のエルサレム入場の際に民衆の歓呼としてマタイ21:9等にも出てきます。ヨハネ黙示録4:8には、すでに両者を合わせた整った形で記されていますから、教会でも早い時期から讃歌として定式化されたものだったのでしょう。礼拝には、前半部分が350年頃から取り入れられ、後半は600年頃に、典礼歌となりました。始めは、設定辞（パンとぶどう酒の聖別）の前後に分けられていましたが、やがて一つの詞になり、伝統的にこの二つが結び合わされて一般に「サンクトゥス」と呼ばれるようになりました。

前後半に分けられた歌詞は、前者が、特別序詞の最終句「今、地にあるすべての教会は、……声を合わせて歌います。」を受けた神讃美を構成し、後半は、「主のみ名によって来られるかた」への来臨讃美として、礼拝の次にある「キリストの聖体設定（パンとぶどう酒の聖別）」＝「来たるべき方キリスト」への準備定詞となるのです。マタイ23:39

では、神殿の崩壊の予告とともに、主イエスが、この言葉を言うときまで、決してわたしを見ることがない、といわれています。逆に、私たちは、この讃歌を、主を見ることがゆるされる者として、唱えていきたいものです。ちなみに「ホサナ」は「主よお救いください」の意味です。今、ここで、見えるみ言葉、聖餐に与ること、その度に繰り返される救いのみ業に心をよせつつ、讃美したいものです。

【設定辞】

設　定　〈設定は一同起立のうちに行なわれます〉

（一）

司〕　私たちの主イエス キリストは 苦しみを受ける前日、パンを取り、感謝し、これを裂き、弟子たちに与えて言われました。「取って食べなさい。これはあなたがたのために与える私のからだである。私の記念のため、これを行ないなさい」。

食事ののち、杯をも同じようにして言われました。「取って、飲みなさい。これは 罪のゆるしのため、あなたがたと 多くの人々のために流す 私の血における 新しい契約である。私の記念のため、これを行ないなさい」。

衆〕　アーメン。

（二）

司〕　聖なるみ心を成就し、私たちの救いを成し遂げるために、私たちのイエス キリストは苦しみを受ける前日、パンを取り、感謝し、これを裂き、弟子たちに与えて言われました。「取って 食べなさい。これは あなたがたのために与える 私のからだである。私の記念のため、これを行ないなさい」。

食事ののち、杯をも同じようにして言われました。「取って、飲みなさい。これは 罪のゆるしのため、あなたがたと 多くの人々のために流す 私の血における 新しい契約である。私の記念のため、これを行ないなさい」。

主なる全能の神よ。キリストの苦しみと死と、栄光の復活と、昇天、また 再臨の御約束を思い、あなたに感謝をささげます。私たちは あなたのみ前に立ち、み子の命じられた記念のわざを行ないます。

父なる神よ。あなたご自身が 聖霊によって これらのパンとぶどう酒を祝別してください。これを受ける者が 一つとなり、信仰を堅くし、みことばと聖霊に満たされ、み子イエス キリストによって、あなたを讃美するに至るよう導いてください。

（聖なる賜物を受ける私たちが 天の祝福と恵みに満たされ、罪のゆるしを受け、体も心も清められ、主に喜ばれるすべての聖徒と共に、天の祝宴にあずかるに至るように導いてください。）

すべての栄光と讃美が、教会において、キリストにより、聖霊と共におられるあなたに 世々限りなくありますように。

衆〕 アーメン

（三）

司〕 聖なる神、全能の あわれみ深い父よ。

あなたのあわれみは限りなく、あなたの支配は とこしえに続きます。あなたは すべての被造物に 光といのちを満たされました。天地はあなたの栄光に満ちています。

あなたはアブラハムによって すべての民の祝福を約束され、預言者たちによって その約束を新たにされました。世の終わりにのぞんで、み子イエス キリストを遣わされました。キリストは ことばと行動をもって あなたのみ国を宣べ伝え、命を捨てるまで あなたのみ旨に従われました。

（あなたのみ子）私たちの主イエス キリストは 苦しみを受ける前日、パンを取り、感謝し、これを裂き、弟子たちに与えて言われました。「取って食べなさい。これは あなたがたのために与える私のからだである。私の記念のため、これを行ないなさい」。

食事ののち、杯をも同じようにして言われました。「取って、飲みなさい。これは 罪のゆるしのため、あなたがたと 多くの人々のために流す 私の血における 新しい契約である。私の記念のため、これを行ないなさい」。

主が来（こ）られるその時まで、このパンを食べるごとに、この杯から飲むたびに私たちは主の死を告げ知らせます。

衆〕 キリストは死なれました。キリストは復活して今もおられます。キリストは再び来てくださいます。

司〕 このパンとぶどう酒をもって 私たちのためにささげられた主のいのちを私たちは記念します。主の復活の証（アカ）しを信じ、主が 再び来てくださり、大いなる約束の祝宴を 私たちと共にしてくださる日を待ち望みます。

衆〕 アーメン。主よ、来てください。

司〕　今 あなたの聖霊を、復活の主の霊を 送ってください。主のからだと血とを受ける私たちが あなたの栄光を讃美し、すべての聖徒たちと共にみ国を受け継ぐことができるようにしてください。

衆〕　アーメン。聖霊よ、来てください。

司〕　私たちの祈りを、あらゆる場所、すべての時代のあなたのしもべの祈りに合わせ、すべてのものの勝利者として来られる私たちの大祭司の 絶えることのない願いと一つにしてください。

すべての栄光と讃美が、教会において、キリストにより、聖霊と共におられるあなたに 世々限りなくありますように。

衆〕　アーメン。

教会はその始めから、その集団の独自性を、今日私たちが「聖餐」と呼んでいる行為で形造ってきました。「集会」「礼拝」とは、「聖餐」そのものですらあったのです。この行為の名称は古くから様々あり、感謝 Eucharista、奉仕 Liturgia（＝リタジーとは礼拝の意）、群れ collecta、その他多数あります。一般に知られる「ミサ」の用語が定着したのが6世紀頃です。ミサの語源は諸説あってはっきりしません。おそらく「派遣／伝道」の missio（ミッション）と関係があるのでしょうか。宗教改革の時、プロテスタント教会内ではこの用語についての論争があり、ことに日本ではミサというとカトリックの専売特許のようですが、ルターはこの用語を使用していました。それはともかく、礼拝発展の歴史は、聖餐行為がその根源でしたから、典礼の言葉と形態は、ここから発生し、整い始め、しかも急速にまた広範囲に、教会行為＝礼拝として発展しました。たとえば、パウロがコリントの信徒への手紙一の11章で述べているのは、まさに初代教会の礼拝（聖餐）の様子ですし、使徒言行録にも様々な記述があります。また、その他の書簡等に見られる讃歌などは、多かれ少なかれ、当時の教会の典礼に影響されています。ヨハネ黙示録も礼拝で読まれることが前提で書かれ

ているのは、1章の冒頭の讃歌からも明らかです。

よろしいでしょうか。大切な点なので改めて確認をしますが、「聖書にこう書いてある」から礼拝があるのではありません。礼拝が先です。礼拝者（信仰者）がいて、その信仰が、その礼拝が、「聖書」を生んでいったのです。今日、誤った「聖書（絶対）主義」に陥りがちです。つまり、教会性や歴史性を全く無視して、プロテスタントは「聖書のみ」だからといって、ひたすら聖書だけを読み信じ（しかも個人的）、そして自分だけの（独自の！）真理にいたるのが信仰、という勘違いの横行です。しかし、違うのです。礼拝すること、また礼拝を学ぶことは、聖書を正しく読む信仰を興し、育て、根本のところで「信仰」における重要なことを教えてくれるのです。

話がずれましたが、紀元100年頃司教ユスティノスがローマに提出した「弁明書」で「キリストの言葉から成り立つ祈りで、祝別した食物を…」と説明していますが、この「キリストの言葉で成り立つ祈り」が、ミサの設定、典礼文の基礎となりました。最後の晩餐における、主イエス・キリストご自身によるパンとぶどう酒の祝別と、新しい契約のしるし、救いの設定にまつわる、あの言葉・設定語を中心とした部分です。伝統的にこの部分は、キリストの言葉と典礼文の構成により、様々な形で発展しましたが、宗教改革時にルターは、大胆に過ぎるとも思われる刷新、簡略化を行ない、聖体設定に関しては「キリストのことば（VERVA）」＝聖書に記されているもののみを用い、それ以外は一切を省いたのでした。（一）の一般的に教会で用いられているシンプルなものは、その時のルターの「ドイツ・ミサ」の設定辞です。

「これがわたしのからだである、これがわたしの血である」というキリストの設定の言葉自体は、各福音書でも微妙に相異し、古い数多く

の典礼文にも大小の差異があります。これは、おそらく正典（聖書）成立以前の伝承、各文書形成時代の礼拝の行ない方の違いの反映なのでしょう。つまり、聖書成立以前に礼拝聖餐式があったのです。ルターの設定辞は、ルカ22：19以下及びⅠコリント11：23以下から定められています。ところで、設定辞が、「キリストの言葉から成り立つ」という枠組みを伴いつつ継承されて、新約聖書が正典として成立するはるか以前から礼拝式文として構成されてきたのですから、そこには、信仰的に、また教理的に重要な要素（聖餐についての理解において）が示されています。確かに、ルター先生の言われるように、「キリストのことばのみ」で、もちろん聖餐は設定・成立するのではありますが、それだけでは、あまりにもそっけないというか、大切な部分を見過ごしてしまうことにもなりかねません。そのために「新式文」には、ルター以外に2つの設定辞が加えられています。この項の冒頭のところをご覧ください。（一）はルターのもの、（二）は紀元200年頃のヒュポリトスによる典礼文です。形式の整っている最古のもので、エキュメニカル（教会一致運動）の見地からも重要です。（三）は会衆の応答句を伴う終末思想を強調した新しいもので、キリストの記念・想起（アナムネーシス）と聖霊の祈願（エピクレーシス）の意義を取り入れたものとなっています。

【主の折り】

主の祈り　〈一同起立のうちに主の祈りが行なわれます〉

（イ）

司〕　祈りましょう。

全〕　天の父よ。

み名が あがめられますように。

み国が来ますように。
み心が 天で行なわれるように、地上でも行なわれますように。
私たちに 今日も この日の糧をお与えください。
私たちに罪を犯した者をゆるしましたから、私たちの犯した罪をおゆるしください。
私たちを 誘惑から導き出して、悪からお救いください。
（み国も 力も 栄光も とこしえにあなたのものだからです。）
（アーメン）

（ロ）
司〕 祈りましょう。
全〕 天にましますわれらの父よ。
願わくは み名をあがめさせたまえ。
み国を来たらせたまえ。
み心の天に成るごとく、地にも成させたまえ。
われらの日ごとの糧を 今日も与えたまえ。
われらに罪を犯す者を われらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。
われらを試みに合わせず、悪より救い出したまえ。
（国と 力と 栄えとは 限りなくなんじのものなればなり。）
（アーメン）

主の聖体（パンとぶどう酒）の設定に続いて「主の折り」が祈られます。この祈りは、もうよくご存じのものでしょう。マタイ6:9以下、ルカ11:2以下にあるこの祈りは、聖書が正典として成立する以前から、主イエス・キリストご自身が教えられた祈りとして、教会は特別な位置を与えてきました。ルターの小教理問答はいうに及ばず、教会学校の子供たちが一番に覚えるものでもあり、私たちキリスト者の基本の基本、と言ってもよいでしょう。どんな時も、またどんな機会（礼拝）

でも祈られますので、ことさら、礼拝式のどこで祈るべきか、などとは考えてもみないでしょう。しかし、実は、歴史的には、まさに「ここ」に、主の聖餐の設定に引き続いて、それに不可分の関係をもって主の祈りは唱えられてきたのです。つまり、教会はその初めから、主の祈りの「日毎の糧」の糧を「聖体＝聖餐」と理解してきたのです。

これには少々説明が必要でしょう。イエス様がこの祈りで言われたこと、新共同訳聖書では「必要な糧」ですが、直接には「日毎の糧を日々与えてください」という神様への願いであることは間違いありません。ところが、この「日毎」の原語の意味は多様で、1）将来の、来たるべき（つまり終末的）、2）次の（したがって夜祈れば「明日の朝の」、朝祈れば「この日の」）、3）生きるのに必要な、不可欠な、4）イエス様自身が話されていたアラム語では「明日の（マハル）」の意味が強い、ということから、「終末の＝救いの食卓」を「今」「ここで」与えてください、と理解したわけです。すなわち、聖餐とは、そこで与る「主の体と血」は、罪の赦しの新しい約束のしるしであると同時に、イエス様が繰り返し示された「神の国の祝宴」、神様の食卓に招かれ共につくことが許される、永遠の命をいただくしるしでもあるのですから、その、救いを「今」、終末の食卓に「今、ここで」つかせてください、との思いを込めて祈ったのです。栄光の内に主が来たりたもうことを望みつつ、その主が今、このパンとぶどう酒の中に現臨してくださることを信じて感謝し、神の国の先取りとしての聖餐式に与りたいのです。ここで祈る「主の祈り」も決してマンネリにならないよう、心を込めて祈りたいものです。また、先に神の国（天国）に召された人々と共に、この礼拝を守っているということをも、この祈りで確認したいものです。

ところで、主の祈りを暗記している方は、「国と力と栄えとは…」以

下の部分が聖書本文にはないことにお気づきだと思います。もっとも、古い明治の文語聖書（委員会訳）には入っていました。新式文でも（ ）に入っていますが、これは、新約聖書の時代に書かれた「十二使徒の教訓（ディダケー）」2：8にある栄頌句です。旧約聖書時代からある、祈りの後に続ける栄頌歌に依っているようです。おそらく、もともとは主の祈りは司式者が唱え、会衆は栄頌句で応答していたのでしょう。今日の私たちは、この祈りはまさに、神の民の共同体の（食卓）の祈りとして全員で唱えます。

また、その訳語について一言。部分的に直されてはいますが、明治初め（8年、1876年頃）に訳され、定着したのが（ロ）、現在、私たちが覚えているものです。何度も新しい訳がなされましたが、やはり習慣とは恐ろしい、いや、たいしたものですね。未だに、私たちの口には「天にまします…」が、壊れたテープレコーダー宜しく繰り返されます。暗記して定着してしまったものはしかたないですが、式文等、目にしながら唱える際は、極力口語訳を用いる方向で考えたらどうでしょう。新式文の（イ）はNCC（日本キリスト協議会）信仰と職制委員会の共同訳です。日本基督教団でも、新しい式文には入れられています。これを、今からやっていくことによって、マァあと百年もしたら定着する!?ことでしょう。

【平和の挨拶】

平和の挨拶　〈一同起立のうちに平和の挨拶が交わされます〉
司〕　主の平和が 共に（あるように）。
衆〕　また、あなたと共に。

続いて平安の挨拶を交して陪餐の部分が始まります。旧式文の「主の平安なんじらと共にあらんことを」「なんじの霊と共にあらんことを」、新式文では「主の平和が共にあるように」「また、あなたと共に」です。今までにも何度も登場した典礼区分のための挨拶とは性格の異なったもので、これも200年頃には式文化されていたものです。復活の主が弟子たちの中に立って「あなたがたに平和があるように（安かれ）」と言われたことがヨハネ20：19，26に記されていますが、キリストの聖体に与ることを目前にして、復活の主への信仰を表わした挨拶として理解されます。また、マタイ5：23～25の「礼拝前の友との和解」が意識されてもいるのでしょう。しかし、それだけでなく、この挨拶は、古くからの「平和の抱擁」とでも言うべきものでもあります。パウロはⅡコリント13：11以下で「愛と平和の神があなたがたと共にいてくださいます。聖なる口づけによって互いに挨拶をかわしなさい。」と言っていますが（他にⅠペトロ5：14）、ユダヤをはじめ今日でも広く見られる日常の挨拶（抱擁と口づけ）に属する行為でもあります。この挨拶は、ですから、他の典礼挨拶とは違い、単に司式者と会衆が交すだけでなく、パウロが言うように「互いに挨拶を」という会衆全ての相互性が大切です。日本では、隣りの人や、座りあわせた前後左右の人と抱きあったり接吻!!したりは無理ですが（本当はやってみたい？）、握手をしたり（これも、あまりなじまない？）、会釈をしたりして「主の平和、平安を」と言えれば素晴らしいですね。

【アグヌス ディ（アニュスディ）】

アグヌス　デイ（神の小羊）
全〕　世の罪を取り除く神の小羊よ。

あわれんでください。

世の罪を取り除く神の小羊よ。

あわれんでください。

世の罪を取り除く神の小羊よ。

平和をお与えください。

＃アグヌス デイに代えて、教会讃美歌「きよく きずなき神の小羊…」を用いてもよい。

「平和の挨拶」に続いて「アグヌス ディ」が唱えられます。ラテン語で「神の小羊」という意味です。バプテスマのヨハネはイエス・キリストを指し示して「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」（ヨハネ1：29）と言いました。陪餐を前にして、私たちは、過越の小羊としてご自身を献げられたキリストへの讃歌を歌って備えます。

出エジプトにおける「奴隷からの解放」のしるしが小羊の血であったように（古い約束＝旧約）、イエス様が神の小羊として十字架で流された血が「罪からの解放」の新しい約束（新約）であり、そのしるしとして最後の晩餐でぶどう酒を聖別されたこと、その出来事がこれからあずかる聖餐式であることを改めて確認するのです。また、この「小羊の讃歌」は、やがて私たちが加えられる天上での小羊の礼拝（ヨハネ黙示録5：6～14）も想い起こさせます。その来たるべき時を望みつつ、今ここで与ることが許される恵みを覚えて、主のあわれみと平安を祈り求めます。これが唱えられ始めたのは300年前後のことだそうで、グロリア・イン・エクセルシスとほぼ同じ古さです。典礼の中に組み込まれたのは7世紀頃。「世の罪を取り除く神の小羊よ、あわれんでください」と二度繰り返した後、三度目に「平和（安き）をお与え下さい」という現在の形になったのは11世紀のことです。伝統的に、こ

の讃歌は会衆が歌うものとして用いられて来ました。また、ルーテル教会では、この部分から陪餐に移行し、司式者や配餐奉仕者の陪餐が行なわれ、会衆もこれを歌いながら陪餐の場所に移動したようです。

現在、日本の多くの教会でもそのようになされているようですが、くれぐれも、聖壇上のやりとりに気をとられて「アグヌス ディ」を唱え歌うことを疎かにしないようにしたいものです。

【陪　餐】

聖餐への招きと聖餐

司〕　洗礼の礼典にあずかったかたは、聖卓へお進みください。
（他のかたはそのまま、黙想のうちに お待ちください。）
＃配饗に際していう。

（一）

司〕　あなたのために与えられたキリストのからだです。
衆〕　アーメン
司〕　あなたのために流されたキリストの血です。
衆〕　アーメン

（二）

司〕　キリストのからだです。
衆〕　アーメン。
司〕　キリストの血です。
衆〕　アーメン
＃配饗後に祝福をする。
司〕　私たちの主イエス キリストのからだとその尊い血とは、信仰によって、あなたがたを強め、守り、永遠のいのちに至らせてくださいます。
衆〕　アーメン

これが新約聖書でいわれる「コイノニア」、(Communion コムニオ＝第一義的には、キリストにおけるお互いの交わり)、つまり聖なるキ

リストの体と血に与ること、と言われている事柄です。別に「パン裂き」(使徒言行録2:42等) とも呼ばれました。初代教会においては、礼拝＝聖餐式とは、まず、最後の晩餐の追体験であり、文字通りの食事(の礼拝) であったのです。「アガペー (愛餐会)」とも呼ばれたこともありました。それは満腹するほどに食いかつ飲んだ会食礼拝でした。Ⅰコリント11:21以下では、その行き過ぎをパウロが戒めています。それはともかく、そういう性格ですから陪餐は、各自の席で行なわれました。4世紀のキリスト教公認後、会衆の規模が大きくなるにつれて、礼拝の「パン裂き」の仕方も変化し、パン (カトリック教会はホスティア＝犠牲、と呼ぶ) はあらかじめ用意された小片のものとなりました。また、大型化した集会所では、自席陪餐から聖壇 (聖卓) 部へ出ていっての陪餐へとなっていきました。12世紀になると、ひざまづく姿勢がとられるようになります。

13世紀までは確実にパンとぶどう酒の二種陪餐でしたが、あまりにも聖体 (パンとぶどう酒) 自体への崇拝が進んだため、信徒はパンだけによる一種陪餐になってしまいました。これは「無自覚な信徒が粗相をしないため！(液体はこぼしやすい)」ということです。今でもカトリック教会は一般的には、一種陪餐で、ぶどう酒は司祭の専売特許？として、ミサの中でカリスを一人で飲みほします。とはいえ原則的に、二種が妨げられているわけではありません。それはともかく、このこともルターの宗教改革の論点の一つとなり、ルーテル教会では本来の二種陪餐が回復されることになりました。また、配餐に際して司式者が陪餐者の口へ直接与える方法は9世紀頃から行なわれはじめたようです。今日でも、まったく行なわれないわけではなく、神からの恵みの糧を受けるという受動的な所作としてはよいかもしれませんが、一方

で、主が「取りなさい（マルコ14：22)」と言われた意味を自覚的にとらえ、私たちの信仰の決断としていただく（もちろん恵みであることは前提ではありますが)、という余地を残して行なわれています。さらに、ルターは、聖卓へ（前へ）出ていくこともまた「信仰の告白だ」といいました。みんなが見ているのですから。多くの教会では、会衆を主の食卓にお招きする旨をはじめに伝えますが、聖餐そのものは「取りて食せ」で各自が、取るやり方をしているのではないでしょうか。また、ルターの強調点は、(一）の「あなたのために」、つまり、私たち一人一人に与えられた、ということの重要性であったことは、大切なことです。

ところで、聖餐の理解について一言。今日、プロテスタント教会の一部、僅かではありますが、未受洗者の陪餐が行なわれているようです。配餐の時に未受洗者が取り残され差別されているように見えることへの配慮ということのようです。しかし、これは教会における悪しきヒューマニズムというべきでしよう。聖礼典は教会と信仰の立ちもし倒れもする根幹の事柄です。その理解の揺らぎは教会の信仰の問題なのです。聖餐は、単なるパンとぶどう酒の分かちあいの儀式ではありません。それは人間の言葉では言い表わせない神秘（秘義）であり、むしろ私たちは、その語り尽くせない賜物の故に、感謝と讃美のうちに恵みを受けます。洗礼によって神の子とされたものが、応答としての信仰において受ける時、まさにそれは真のキリストの体と血として与えられるのです。その過程なしに、つまり神への応答なしに、自由に陪餐が行なわれることは、聖餐の極端な魔術化と象徴化が起こることになるのではないでしょうか。

「未受洗者の陪餐問題」は、くり返しますが、これは聖餐理解の根幹

に関わる大問題です。ことに日本のような伝道地の礼拝においては、陪餐の時、確かにまだ洗礼を受けていない方々と、信徒との間に、ある種の「垣根、隔て」が生じます。未受洗者にとっては差別されているような思いを抱かせるでしょう。しかし、だからと言って、「それはよくないので全員陪餐にしよう」というのは明らかに短絡的と言わねばなりません。よく言われることですが、「差別」と「区別」は違うのです。一部のキリスト教会ですが、このことが理解されていないのは残念ですし、皆様も、様々な状況で（例えば、未受洗者の友人を誘って礼拝に出た時、どうしてその友人は陪餐できないのかをちゃんと説明すること）こういう問題に遭遇するかもしれませんので覚えておいていただきたいのです。聖餐は、赦しの約束という神の言葉また行為そのものをいただくことです。あるいはイエス・キリストというみ言葉また、その命そのものです。確かに見える形は「聖別されたパンとぶどう酒」ですが、それが生ける神の言葉として与えられるのです。それは、「罪の洗い清め」である洗礼と結び付いています。キリストの十字架と共に、古い（罪の）自分が死に、同時にキリストの復活に結ばれて新しい自分が生かされる、その出来事が唯一回かぎりの洗礼によって起こります。そのキリストが設定し、そのことによって永遠の命を生きる約束をいただいたものへの「糧」が聖餐式に他なりません。ですから、教会は毎週、主の復活を祝って礼拝し、聖餐式を守り、繰り返し主の業と出来事を記念し、想起し、与るのです。私たちルーテル教会は、そのように理解します。聖餐は、このような意味でのみ言葉である限り、「キリスト現臨（リアルプレゼンス）」をもたらし、何よりも信仰をもって受け入れられることが求められるのではないでしょうか。そこに結び付かない聖餐は、「極端な魔術化と象徴化になる」の

です。

私たちの教会とは違う聖餐理解は大きく分けると二つあります。一つは、カルヴァン（とその先輩ツヴィングリ）の象徴説ですが、これは、聖餐はキリストの十字架の出来事の象徴（しるし）にすぎない（つまり忘れないための儀式）というものです。この考えですと、儀式への理解さえあれば誰だって陪餐可能になります。カトリック教会は（まあ、いろいろと議論があって複雑とはいえ）、聖餐は、パンとぶどう酒が「実体変化」してキリストの体と血そのものになる、というものです。もちろん、こういう理解ですから、未受洗者の陪餐は無いのですが、よく考えてみてください。実は、この実体変化説を突き進めれば、逆に、パンとぶどう酒という物体そのものがキリストそのものなのですから、信仰の如何を問わず、それには効力がある、と魔術的な説明が可能で、そうなれば、未受洗者でも与えれば「功徳あり」という理論になりかねません。これら二つのおかしなところはもう説明しなくてもよろしいでしょう。確かに、理論的な説明（人間の理解）では、この二つのどちらかがわかりやすいのです。しかし我がルター先生の偉いところは、このどちらでも説明をしなかったところです。キリストの肉と血は、パンとぶどう酒と「共に」、「中に」、「もとに」おられるのであり、信仰によって受け入れる時、それはまさしくキリストそのものである、というように言いました。逆にいえば、それ無くして受けるのはただの物体にすぎないわけです。ですから、陪餐に際して必要なことは、未受洗者を差別しているか否か、ではなく、その恵みの特別性を伝え、一日も早く洗礼という大いなる恵みに到るよう勧め、祈り、招くことです。また、共に礼拝に集う者として未受洗者に「主の祝福と導き」を祈ることをすべきでしょう。その意味で聖餐式は最大

の信仰の決断の促しの時であり、伝道の時でもあるのです。

ところで、洗礼＝陪餐＝「信仰によって」となると、今度は、洗礼と信仰告白の問題も出てきます。かつては、嬰児（小児）洗礼者は、堅信という「信仰の告白」を経て、つまり、自覚的な応答によって初めて陪餐になる、という慣習が続いていました。しかし、信仰の告白とは、必ずしも私たち大人が理解し、把握し、なしえる応答の告白、形だけではありません。そういう一般的な告白をなしえない精神や肉体の障害者はどうなるのか。子供も含めて、たとえ、はっきりした形をとらなくても、それぞれの仕方で（それは形をとらないことも有りうる）、神さまの恵みに与っていることを「告白」「応答」しているのです。嬰児、小児の場合は、親や教保が代わって（執り成し＝代理の信仰）告白できますし、何より、信仰は、個のものであるのと同時に、神の民という共同体（教会）の告白するものですから、その脈絡で洗礼と聖餐という聖礼典の執行があるのです。ですから、無自覚、無秩序にそれが行なわれることは、厳に慎まれねばなりませんが、単に「自覚的な信仰告白」の形を取らない場合でも、聖礼典は執行され、小児陪餐も行なわれるようになりました。

陪餐問題について述べてきましたが、最後に一言。「未受洗者の陪餐」を考える時の方向性です。様々な理由で信仰告白に到らない方々（知的障害等）、あるいは未堅信の会員で陪餐教育のない方が、しかし礼拝に共に集い、陪餐を希望することもあり得ます。その場合、これは差別でなく「区別」ですからと無下に拒絶してしまえない状況も考えられます。そんな時はどう考えればよいでしょうか。以下のことは教会の公式見解ではなく、あくまでも私の個人的意見ですから、間違えないでください。私は、そんな場合は、「恵みの分与」そしてルターのい

う全信徒祭司性における「相互の取り成し」の面で対処できるのではないか、と思っています。具体的に言えば、教会は、公式には未受洗者に陪餐を許可できません。しかし、そこで陪餐を受けた信徒（既洗礼者）が、その場で特別に、自分のいただいたパンとぶどう酒を、未受洗者で陪餐を熱望する者に、その時だけのものとして、自分のものを分け与えることまではとやかく言えないのではないか、ということです。すなわち「恵みを分け与え、取り成しをする」ということです。もちろん、それは無制限に、無秩序に行なわれてよいものではありませんが、その会衆内や、各個教会レベルでコンセンサスを得ていけば、行なえる可能性はあるかもしれないと考えています。皆様はどうお考えでしょうか。例えば、似たようなことは、小児陪餐についても言えます。現在は、一応の陪餐教育を経て、学齢時ぐらいまでをめどに陪餐させる、というのが目安ですが、実際は、その見極めと、子供の聖餐への「わきまえ」というのは判断できるものではありません。これも、親と共に陪餐に与るならば、必ずしも教育云々は厳密でなくてかまわないと考えられないでしょうか。親、または教保が、本当に厳粛に、感謝をもって聖餐に与るならば、それと共に集う子供達も自然と「聖なるもの」への信仰を養われていくに違いないと思っていますし、そうあるべきなのです。

また、心身障害者の信仰告白と陪餐の課題も、教会が教会の責任として行っていく必要があることも忘れてはなりません。

【聖餐の感謝】

聖餐の感謝

司〕　主に感謝しよう。主は恵み深く。

衆〕　そのいつくしみは とこしえに絶えることがない。

司〕　全能の神よ。

この救いの賜物をもって、新たな力を与えてくださったことを感謝します。恵みによって、私たちが ますます主を信じ、また 互いに愛をもって仕えることができるように 私たちを強めてください。

あなたと聖霊とともに とこしえに ただひとりの神であり、世の終わりまで生きて治められるみ子 主イエス キリストによって祈ります。

衆〕　アーメン。

＃聖餐感謝の祈りは、次の祈りに代えてもよい。

司〕　主よ。

私たちが 口に受けた賜物を清い心をもって受けさせてください。

今、私たちに与えられた賜物が、永遠のいのちのための糧となりますように。

あなたと聖霊とともに とこしえに ただひとりの神であり、世の終わりまで生きて治められるみ子 主イエス キリストによって祈ります。

衆〕　アーメン。

陪餐を終え、礼拝は聖餐の部の最終部分に移ります。そこには「感謝の祈り」が置かれますが、それに先立ち、聖句唱が交唱されます。「主に感謝しよう、主は恵み深く（旧式文「主に感謝せよ、主の恵みは深し」）」です。会衆は「その慈しみは、とこしえに絶えることがない」（旧「主の慈しみは、とこしえに絶えることなし」）」と答えます。この言葉は詩篇118：28に依っています。これは、カトリックの典礼から受け継いだ聖体拝領頌（聖餐頌）を簡略化し、意味を聖体そのものへの讃美から、神への感謝に起きかえたものです。また、陪餐によって起こる席の移動等の会場のざわめきを静め、再び会衆の心を一つにしていく

ためのものです。

続いて「感謝の祈り」が祈られますが、これはルターの「ドイツ語によるミサ」という宗教改革時の最初の礼拝式文から取り入れられたものです。これは、同じくルターがカトリックから離れてすぐに造った、まだ幾分カトリックの影響が残っている「ラテン語によるミサ」から発生し、変更されたものです。ラテン・ミサではこうなっています。「主よ、私たちが口で受けた賜物を、清い心で受けさせてください。この世で私たちに与えられた賜物を、永遠の生命の糧としてください。主よ、私たちに与えられた主の体と血とを、私たちのうちに保たせてください。この聖なる礼典を受けた私たちに、罪を留めおかないでください。世々に生きてお治めになる主よ」です。この祈りの前半は、この項の冒頭にある式文語句の「次の祈りに代えてもよい」以下に載せてあるものです。一般的に用いられる、はじめの方のもの（ドイツ・ミサによる）と比べてみてください。ルターにおいても短い間に聖餐や礼拝理解に進展というか、変化があることがわかります。当時のカトリック的な聖餐式の犠牲思想の問題を整理し、新しい定詞句を組み込んで明確な感謝の表明へと作り直しています。

しかし、いずれにしても、この二つのものは、ルターにさかのぼる、私たちルーテル教会の礼拝にふさわしいものです。

5. 閉会、または派遣の部

祝福の挨拶

司〕　主が 共に（おられるように）。

衆〕　また、あなたと共に。

これまで何度も出てきた、礼拝の区分にあたる「祝福の挨拶」（主が共に／またあなたと共に）が交され、礼拝はいよいよ終わりの部分に入ります。旧式文では、ここから直ちに「祝福（祝祷）」になりましたが、新式文では、ここに新たに「派遣の部」が置かれています。しかし、元来、礼拝は、陪餐の感謝と陪餐後の祝福（陪餐直後の「私たちの主イエス・キリストのからだとその尊い血とは、信仰によって、あなたがたを強め、守り、永遠のいのちにいたらせてくださいます」の部分）で終わりでした。ただその後で、司教（上位聖職者）が臨席の礼拝のみ、例外的に、「特別の祝福」が司教によってここに追加されたのです。しかしやがて、それが一般化して、独立した「祝福」が行なわれるようになったのです。ところで、ここに「派遣の部」が設けられたのは以前にも述べた、もともとの礼拝区分の考え方の修正に基づいています。（「奉献の部」を参照下さい）。み言葉の部と聖餐の部が、昔は未信者と信徒の部としての二つに句切られていたのですが、その区別をなくし、一本化するためにみ言葉の部の終わりにあった「教会の祈り」を「聖餐の部」の後ろに移したのです。

【ヌンク ディミティス】

ヌンク ディミティス（今こそ去ります）

全〕　今、私は主の救いを見ました。
主よ。あなたは みことばのとおり
しもべを安らかに去らせてくださいます。
この救いは、もろもろの民のために お備えになられたもの、
異邦人の心を開く光、
み民 イスラエルの栄光です。　（＃栄頌を続けてもよい）

最後の「祝福の挨拶」に続いて、新式文では今までになかった「ヌンク ディミティス（今こそ去ります）」が唱えられます。礼拝の最後が「派遣」として意味づけられる典礼歌です。これはルカ2:29～32の「シメオンの讃歌」と呼ばれるものです。幼子イエスを腕に抱き、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」と言ったシメオンの言葉を私たちは礼拝のたびごとに唱えることになります。それは、私たちが礼拝に招かれ、み言葉（説教と聖餐）を受け、罪が赦され、復活と永遠の生命の約束が与えられたこと、そして、兄弟姉妹との交わり、公同の礼拝全体、教会そのものによってキリストの臨在に与ったからです。まさに、礼拝という「救い」を見た、キリストを胸に抱いた出来事に遭遇することができたからに他なりません。この喜びの内に、私たちは再びキリストによって遣わされた場所に帰っていきます。教会に集められ、またそこから派遣される、これこそ礼拝の業でありキリスト者である私たちの姿です。「今こそ去ります」「あなたの救いの中に、私は歩きます」この確信の中に生きていくのです。また、こうも言えるかもしれません。シメオンの「去らせてくださいま

す」は、もちろん、第一義的には、当然この世を去らせてくださいます、です。あるいは、この礼拝が、その時の派遣が、もしかすると、あなたにとり、私にとり、この地上での最後の礼拝であり、派遣であるかもしれません。私たちは、礼拝をそのように毎回毎回、終末的な出来事として捉えていくことの大切さを覚えなければなりません。本当に、「今、私は主の救いを見た、安らかに去ります」そう言える礼拝としたいと思います。

この讃歌が通常の礼拝に組入れられたのは、宗教改革からでした。しかし、それはこの讃歌がそれまで、あまり評価を得ていなかったからではなく、古くからこれは、毎日の聖務日課（ローマカトリックもギリシャ正教でも一日8回のお祈りがある）の最後に用いられていたものです。宗教改革時には、多くのプロテスタント教会で用いられました。日本のルーテル教会では古い文語式文で採用されていましたが、旧式文ではなぜか省かれていましたので、あまりなじみがなかったかもしれません。新式文で再び回復されたのは喜ばしいと思います。また、新しい葬儀の式文でも、その最後に採用されているのは、上記に述べた理由で、まことにふさわしいことだと言えるでしょう。

【教会の祈り】

教会の祈り

司〕　祈りましょう。

（祈りの導き）

司〕　私たちの主イエス キリストの父、全能の神よ。
あなたは 天地を造り、これを治め、救い主 御ひとり子を与え、み心と み恵みとを現わしてくださいました。（また、慰め主なる聖霊と 聖なる教会と 恵みの手段と 信仰の交わりと、永遠のいのちとを与えてくださいました。）

私たちは これらの限りない恵みに 心から感謝し、讃美をささげます。
父よ、あなたのいつくしみのうちに 日ごとあなたの民をかえりみ、み子イエス キリストのゆえに、民の祈りに 耳を傾けてください。

（諸祈祷）　＃「祈りの導き」に続いて、司式者または他の祈祷者は、××頁に掲げられる諸祈祷或いはその他の祈りから、その日に必要ないくつかを選んで祈る。

（終わりの祈り）

司〕　父なる神よ。
私たちの祈りを聞きとどけてください。私たちの思いと願いを越えて、み心によって、あわれみと愛のうちに 私たちを守り、日ごとにみ旨を明らかに示してください。
私たちの主、み子 主イエス キリストによって祈ります。

衆〕　アーメン

＃聖饗が行なわれない場合には、「教会の祈り」に続いて、全員で「主の祈り」をする。

この祈祷は、他の呼称として「共同の祈り」「総祷」「信徒の祈り」等と呼ばれていました。典礼上の起源は、ユダヤ教会堂（シナゴグ）における教訓・説教に続いて行なわれた集会者の多数の人の祈りが、教会に引き継がれたものです。このため、前も触れたように、この祈りは「みことばの部」の最後に置かれていましたが、みことばの部の終了と共に、未信徒の退場の形式がなくなり、続く聖餐の部の始めである「奉献祈祷」の比重が高くなり、その区別が不明確となって廃止されていったのでしょう。さらに、宗教改革時に、ルーテル教会はその「奉献祈祷」における当時のカトリック的な考え方（聖餐式の犠牲の強調）を批判し、その代わりに「教会の祈り」が回復されたのです。それが以前の旧式文まで残っていたわけです。しかし、新式文では、礼拝が「みことばの部（古くは未信徒の部）」と「聖餐（信徒の部）」と

いった不連続性の構造ではなく、み言葉と聖体を一体性とする礼拝理解と構造に立つことにより、福音に生かされた者の祈りの結集は、一つの礼拝の最後に置かれることが望ましいと考えられるようになり、ここで「教会の祈り」が祈られるようになったのです。また、これが「派遣の祈り」であることも重要でしょう。私たちが遣わされているすべての事柄のための祈りであり、ここでは教会、社会、国家、家庭、個人の牧会的なことに関わるあらゆることについての祈祷がなされます。

Ⅰテモテ2:1に「願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい」との勧めがあるように、この祈りは、祈る者が礼拝者を代表する祭司として神の前に立ち、全教会と全世界のために感謝し、願い、執り成すのです。ですからこの祈りは祈る人の個人的な祈りではなく、普遍的な内容がその本質です。また、ルターは、この執り成しをする、という意味で「私たちは全ての人が祭司である（万人祭司＝全信徒祭司性）」と言いました。これは決して「万人が司祭（牧師）」であるとか「全信徒が司祭になる制度」という意味ではなく、全ての信徒は執り成しの祈りをする祭司（の性格）であるということです。ですから、この祈りにおいて、私たちは心を合わせ、言葉を合わせて「アーメン」と唱えなければなりません。そして、そのようなものですから、一人の人だけでなく、多くの方の祈りを合わせていくことが必要でしょう。また、祈りの課題を持ち寄って代表者に託すということが行なわれるとよいと思います。ある教会では、献金の時に教会の様々な課題や各自の祈りの課題のメモが集められ、司式者（あるいは、祈りの担当者）に渡される、ということが行なわれたりしています。

いずれにしても、礼拝の終わりに、なくてはならない大切なものとして位置付けていきたいものです。

【ベネディカムス】

祝　福　〈一同起立をして派遣の祝福告受けます〉
司〕　主をたたえよう。
衆〕　神に感謝します。

教会の祈りが終わると、いよいよ礼拝の締め括りとなる、祝福（祝祷）がありますが、それに先だち、司式者と会衆が挨拶を交します。ベネディカムス（我らほめたたえんの意）と呼ばれるもので、新式文「主をたたえよう」「神に感謝します」、旧式文「主をあがめん」「神に感謝をささげん」の部分です。この頌句は詩篇の各巻の末尾にある神讃美の頌句です。詩篇全150篇は元は巻物で五巻（五分冊）だったようで41, 72, 89, 106, 150篇のそれぞれ末尾に、特別の結語が付いています。これは、詩篇の言葉ではなく、それぞれの巻の終わりに付いた頌句であったのですが、それが礼拝での祝福の前に唱えられる定詞となったのです。

これが取り入れられたのは中世以降のことで、始めは、待降節にだけ唱えられ、他の期節は古くからの「Ite missa est」（行け、ミサは終った）との司祭の言葉で散会となったようです。復活節にはこれに「ハレルヤ」が追唱されました。ルターは、先のベネディカムスに「ハレルヤ」を加え固定し全期節共通としました。それは、基本的に礼拝そのものは「主の復活を祝う」ということからだと思われます。会衆の応答句は「Deo Gratias」（神に感謝）で、ルターもこれを採用しハレルヤを追加しています。今でも、ヨーロッパ系のルーテル教会はハレルヤが入っていますが、なぜかアメリカや日本のルーテル教会は、ハレルヤを含まない頌句と感謝句を採用しています。ただ、最近の傾向

では、より古い「行け、ミサは終った」「神に感謝」の方になりつつあるようです。

私が在学中のルーテル神大（現「ルーテル学院大学」）の礼拝では、「行きましょう、主の平安のうちに」「神に感謝」でした。個人的に気にいっているのは、聖公会の古い式文のもので「司式：いざ我らいでゆかん」「会衆：主のみ名によりて、アーメン」というシンプルなもの。何か、元気が出る感じで好きでした。おそらく古くは、以前に述べたみ言葉の部が終わって未信者の退場を促す時の詞句であったものが、ここに移され残っているのでしょうが、さあ、礼拝は終わった、さあ、主の派遣を受けて、この世に遣わされよう、ということを確認する意味で大切なことを教えているようです。また「行け、ミサは終わった」というのも、少々ぶっきらぼうな感じですが、ミサ（Missa）の語源が（諸説ありますが）、Missio（派遣）に由来すると考えるならば、礼拝が終わった、とはつまり主の派遣を受けた、ということで、私たちすべての礼拝者（信仰者）の新しい歩みへの促しを、そこから聞いていくことになります。私たちの新式文では、これらの言葉はありませんが、そのような思いで礼拝の締め括りの祝福を受けたいものです。

【祝福（祝祷）】

（一）

司］　主が あなたを祝福し、

　　あなたを守られるように。　　（または、－－－守られます）

主が み顔をもって あなたを照らし、

　　あなたを恵まれるように。　　（または、－－－恵まれます）

主が み顔をあなたに向け、

あなたに平安を賜わるように。　　（または、－－－賜わります）
父と 子と 聖霊のみ名によって。

（二）
司〕　全能の神の祝福が あなたがたと共にあるように。
父と 子と 聖霊のみ名によって。

（三）
司〕　主イエス キリストの恵みと、神の愛と 聖霊の交わりとが、あなたがた一同と共にあるように。
衆〕　アーメン、アーメン、アーメン。　　または、アーメン。

祝福は元来、聖書では、大変幅広い意味を含むもので、一言でいえば他者に対して喜びをもたらす一つの行為といえますが、広くは、神が人をさきわい、人が神に対して讃美し感謝する。そうした「さきわい」「讃美」「感謝」等を総称的に表わしています。これが礼拝の最後に置かれるのは、もちろん、神から人への祝福です。前にも述べましたが、元来は「陪餐後の祝福」で一切は完了していたのですが、上位聖職者臨席の場合、特別の祝福が、それに引き続きなされていました。やがて平!? の司祭にもそれが許されるようになりました。ただし、その際の祝福定詞は区別されていたようで、カトリックでは今でもそうだそうです。とにかく、制限はありましたが祝福がなされ、典礼化され定着したのは13世紀頃からと言われています。

新式文に載せられているのは（一）はアロンの祝福、民数記6：24～26から。（二）はローマ型と言われるもので、ルターも採用した古くからのもの。（三）は　コリント13：13からの大変有名なものです。伝統的にルーテル教会は、礼拝では（一）を主に用いてきましたが、それ

以外では（三）が一般的なようです。この他にローマ15：13（説教後の祝祷でおなじみ）、ヘブライ13：20，21（葬儀や記念式等の時によく用いられる）等があります。新式文にはまた、アロンの祝福が、従来の祈願形（「…ように。」）と並んで、宣言形（「…ます。」）があることに驚きや、新鮮さを感じられた方もあるでしょう。原語のヘブライ語ではどちらとも定めがたいのだそうです。しかし、明確なことは、「主が」すなわち、行為者、祝福者が神様であることです。祈願の形で祈られても、または確信のもとで祝福の宣言がなされても、大切なのは、主が、神さまが祝福をくださる、ということです。よく、信徒礼拝の時等で司式者である信徒は祝福を行なえないとか、行なう時は人称を変える（「あなたがたを」を「私たち」とする）べきだ等と聞くことがありますが、これは古いカトリックの、上位聖職者の特権行為としての「有り難き祝福」的な考え方の名残です。私たちの礼拝においては、誰がしようと、司式者と会衆の間で、祝福が賜われ、願われ交される所に、主の祝福があることを覚えたいものです。復活の主が、昇天される時、弟子たちを祝福し派遣されたように（ルカ24：44～53）私たちも今や、主の祝福の内に送り出されて行くのです。

【おわりの歌】

終わりの歌	＃讃美歌を用いる。
奏　楽	

主の派遣の祝福を受け、礼拝は実質上終わります。礼拝において受けた、神と、復活の主と、聖霊との交わりを携えて、今度は隣人と恵

みを分かち合うために出かけて行きます。私たちは主の証人として、この世の日々の生活の中へ主の平和と平安を運んで行き、また、主の愛と主のみ国の完成の希望に生かされて歩んで行きます。その決意の表れとして、さらには信仰の感謝や讃美を再確認するものとして「おわりの歌」が歌われるのです。もっとも、「祝福」に対して「アーメン」を持って応え、「然り、その通りです」と唱えたのですから、この讃美歌は絶対必要な礼拝の要素ではありませんから、時間の関係上省くことがあっても構いません。しかし、最後に、もう一度力強く元気に、参列者全員で讃美の声をあげるのは、これまでに述べたことからも意義深く、ふさわしいことだと思います。たとえ少々帰宅時間が遅れることがあったとしても、です。

【後　奏】

特にきまりはありませんが、後奏がここで奏されます。その日の礼拝の恵みを想い起こし、もう一度、み言葉を覚えるために、黙想する時が備えられるのです。

【ま と め】

この小冊子は、礼拝をさらに豊かなものとするために、また「礼拝を中心とした教会形成」という教会のあるべき基本姿勢に寄与するためにまとめたものです。そして、個人的には、「ルーテル教会の礼拝は、式文があり、ややこしく、殊に新来会者にはとっつきにくく、それが伝道の妨げとなっている!!」との根強い批判に（残念なことに、教職の中にも同様の意見が散見されるのは不可解）応えていきたいとの願いも込められていました。このような意見は、基本的な礼拝理解の欠如のためであり、「礼拝とは」、という基本を抑えつつ、礼拝構成内容（要素）の個別の知識と、礼拝の歴史を大雑把に把握することによって解決できると思っています。いえ、そのことさえできれば、むしろ、信仰者はもちろん、求道者や新来会者を問わず、礼拝こそが、「教会（信仰）」の中心であり、すべてであることに気づくはずです。まさにここにおいて、確かな「神様の出来事」があり、神の業と私たちの出会いが起こること、そのことに常に言及してきたつもりです。すなわち、「礼拝の法は信仰の法」そして「信仰の法が礼拝の法」なのです。

あえて私たち信徒には自明のことでもあった礼拝について、こと細かく考えてきたのは、私たちがいつどこででも、この点に帰ってくることが必要だからです。そして、この点を、いつでもどこででも、誰にでも「証し」することができるようにならねばならないと思うからです。その意味で「礼拝」こそ「伝道」に他なりません。この礼拝共同体たる教会は、まさに礼拝において「伝道」しなければならず、しているのです。ですから、時間が許せば、是非この小冊子をもう一度読みかえしてくださり、私たちの教会の礼拝とは何であるのかを、あなた自身の言葉で語ることを試みていただきたいのです。そして、あ

なたが毎週礼拝に集っていることによって、その礼拝共同体がその地に築かれ、今までも、またこれからも礼拝が守られていく重みと意味を再確認していっていただきたいのです。礼拝は、単なる「講演会」や「宗教（文化）サークル」ではないのです。それは、あなたが礼拝出席者であるということが、礼拝における神の業の担い手であること、神の救いの歴史の参与者であることを意味しています。もちろん、まずそれに与ることは当然ですが、あなたの礼拝出席が、「神の出来事」の脈絡で捉えられるということの強調は、いくらしてもしすぎることはないと信じています。だからこそ、私たちは礼拝を決して疎かにしませんし、絶対にできないのです。

また、先の批判の「とっつきにくい、新しい人になじみにくい」との意見も、まずこの理解に立って考えていきたいのです。では、簡単に、適当にわかりやすくすればよいのでしょうか。それは何を基準にするのでしょうか。もちろん、礼拝は「神の業」でありつつ、眼に見える「教会の業」であり続けました。歴史的、文化的な背景の中で形成され変化してきたものです。しかし、それは常に人間の、諮意的な、気ままなものとしてではなく、それぞれの教会の公同性の中でとらえられ、信仰の共有と継承として理解されてきたものなのです。それが揺らいだ時が、教会の変動と分裂を招きましたし、改革の時でもあったのです。そのような歴史の中から、私たちが学んだことは、基本に立つこと、人間があれこれ付け加えるのではなく、礼拝の本質的な、これだけは、無くてはならぬものは何か、に立ち帰っていくということでした。その中で守られ、継承されているものが信仰、すなわち礼拝だったのです。私たちは、その教会のそして礼拝の歴史性にもっと謙虚になりその重さを尊重したいと思います。初めての人がとまどうな

ら、わかりやすく意味を説明しましょう。くり返し、思い起こしましょう。「礼拝の法が信仰の法」であることを。形式を疎かにすると内容も疎かになります。内容を大切にするためには、その容れものである形が重要なのです。それに、私たちが何かに入門する際に、「すべてわかりやすければよい」でしょうか。むしろ難しくてわからないからこそ、学びつつ求めていくのではないでしょうか。新来会者の隣りに座るあなたの配慮一つで、礼拝は身近なものとなるはずですし、その意味と内容が深まることが、信仰への大切なステップなのです。礼拝にすべてがあるし、また、礼拝からすべてが始まるのです。私たちのルーテル教会の宣教のわざの、さらなる進展と、私たちの信仰のさらなる正しい確立を願いつつ、この小冊子を閉じたいと思います。

S. D. G.

あとがき

拙著をお届けできますことを感謝いたします。

この小冊子は、前の任地において、「旧式文」から「新式文」に移行する際、教会の月報に連載したものが基になっています。ルーテル教会の礼拝に集う方々に、最低限これだけは知っておいていただきたいという願いをこめて記した、一般信徒向けの式文（礼拝）解説です。それにしては、やや詳細すぎる所や、逆に、未だものたりない所もあるかもしれませんが、それは、私たちの教会の礼拝に誇りと自信をもっていただきたいとの熱意と、各教会での学びと討議のきっかけになればとの思いが相半ばしている結果です。専門的な知識を得たい方は、それぞれ牧師に相談して、学術的・専門的書物にあたっていただきたいと思います。

そのようなわけで、この解説の参考にしたのは以下の二つのみです。「日本ルーテル神学大学礼拝学講座用教材（解説C.ホーン）」と同じく神大の「テオロギア・ディアコニア1982.15号」の「式文試案とその解説」（前田貞一著）です。特に記して感謝いたします。

連載の機会を与えてくださり、最初の熱心な読者となってくださった日本福音ルーテル清水教会の皆様に感謝します。その連載に、出版の機会を与えてくださった西教区長・松原清牧師、特別の励ましと尽力をくださった教育部長・立野泰博牧師、わがままな注文に丁寧に心を込めて本作りをしてくださったダイトウ製版松岡竝之佑氏に感謝いたします。表紙は、新築なる、広島教会の新礼拝堂の絵を使用させていただきました。快くご許可いただいた森勉牧師に感謝いたします。

最後に、個人的な感謝を記すのをお許しください。ただの音楽好き

にすぎなかった私が、礼拝と音楽、そこから信仰についての学びを深め、ついには牧師にまでなってしまったそのきっかけは、ルーテル神大（現「ルーテル学院大学」）での山田実先生の音楽学講義とご指導でした。心から感謝しています。さらに、同校在学中はもとより、現在の「式文委員会」にいたるまでご指導いただいている石居正己先生に、心より感謝を述べさせていただきます。

1996年　顕現節

増刷へのあとがき

このような小冊子はないので何かまとめてみたら、と推められ、恥をしのんで出版してみたところ、望外のご利用を頂きました。

読み返すと、手を入れたいところ、入れるべきところばかりですが、最低限の訂正にとどめ、ここに増刷することとなりました。このため、日本福音ルーテル教会宣教室長の徳弘浩隆牧師のご理解とご協力がありました。感謝です。

すべてのお名前を挙げることができず申し訳なく思いますが、いろいろなご指摘、ご助言、励ましをいただきましたことを、心より感謝いたします。

願わくは、もっとすぐれたものが、ふさわしい方によって書かれるまでの「つなぎ」の役割のために、なおこの小冊子が用いられれば、大変幸いに思います。

主の年2000年を直前に

著　者

著　者
松本義宣（まつもとよしのぶ）

略　歴
1961年生まれ。熊本県出身。九州学院高等学校卒業。
日本ルーテル神学大学及び同神学校卒業。
沼津・下土狩教会、清水教会牧師を経て、
現在　日本福音ルーテル岡山・高松・松江教会牧師。

礼拝の法は信仰の法
～そこが知りたい礼拝式文～

1996年 2月29日発行
1999年10月31日 2刷

著　　者　松 本　義 宣
発 行 所　日本福音ルーテル教会・西教区（協力）宣教室
発 行 者　立 野　泰 博・徳 弘　浩 隆（宣教室）
住　　所　〒730-0045
広島市中区鶴見町2-12　西教区事務所
Tel（082）241-3695　Fax（082）241-3715
http://www12.big.or.jp/~jelc-wd
印　　刷　合資会社 ダイトウ製版